



開発と抵抗：
エチオピア西南部におけるプランテーション開発と
現地住民の生存戦術

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮脇, 幸生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002838

開発と抵抗

エチオピア西南部におけるプランテーション開発と現地住民の生存戦術

宮脇 幸生*

第1章 はじめに

本研究は、国家の周辺的な地域でおこなわれる大規模な開発によって生存の基盤を脅かされた現地住民たちが、開発プロジェクトに対してどのようなかたちで対応し、みずからの生存を確保しているのかについて明らかにすることを目的とする。¹

開発にかかわる人類学的研究には、いかにしたら開発が公正・効率的に行なわれるのかを探究する「開発人類学」と、開発自体を一つの社会的事象として研究の対象とする「開発の人類学」がある。本研究のテーマは従来、「開発の人類学」によってあつかわれてきたものである。だがほとんどの「開発の人類学」は、開発という現象を開発側／住民側という二項対立的な観点からとらえがちであった。そのため開発の現場を、開発に対する住民の側の抵抗や、社会・生活環境の変容という視点でしか描けておらず、開発にかかわる多様なエージェント間の交渉や権力関係、その政治的な意味については、十分な注意を払ってこなかった。巨大資本や国家による開発が地域住民社会におよぼす影響は、近年の地域研究があつかう最重要テーマのひとつとなっているが、それはたんに、そこで深刻な社会問題が発生しているからだけではない。そこではさまざまなエージェントの間の文化的交渉と、多様な生存の戦術が見出せるからである。

本研究の対象とするウェイト川流域は、グローバル化した世界経済に参入しつつあるエチオピアの政治経済の矛盾が、凝縮したかたちで現われている。もともこの地域では、ツアマコ (Tsamako)、ホール (Hor) など、人口数千人規模のいくつかの農牧民が、伝統的な氾濫原農耕と、サバンナでの牧畜に依存して生活してきた。1990年代の初頭、高地人資本家がこの地域で始めたプランテーションは、エチオピ

* 大阪府立大学人間社会学部人間科学科

¹ 本稿のもととなる調査は、科学研究費補助金 (基盤研究 B) 『開発と抵抗—エチオピア西南部におけるプランテーション開発と農牧民の抵抗戦術—』 (課題番号 16401031 2004年～2007年) によっている。故福井勝義先生 (元京都大学大学院人間・環境学研究科教授) は、この計画が私の中でまだ充分明確な形をなしていないときに相談に乗ってくださり、具体的な研究プロジェクトとして応募することを強く勧めてくださった。深く感謝したい。

アが自由市場経済になると一気に規模を拡大し、中流域に住むツアマコのテリトリの多くを接收して、大規模な灌漑設備をそなえた綿花栽培を行なうようになった。南部から貧窮化した農耕民が、季節労働者として大量に移住し、その周囲には商店やキリスト教教会が建設され、人口数百人規模の「町」が出現した。

1996年には、放牧地を奪われたツアマコが武力蜂起し、プランテーションを急襲したが、プランテーション側は地方政府を通じて軍隊と警官隊を派遣し、蜂起した住民を弾圧・処刑した。それ以降プランテーションの周辺には、警察の駐留所が建設され、地域住民への監視が徹底して行なわれるようになっていく。

プランテーションは地方政府の警察権力を利用して、伝統的生活様式に依存する最周辺の農牧民を抑圧しようとした。だが地元農牧民集団も一枚岩ではなく、プランテーションに対立する集団もあれば、それを利用しようとする集団もある。さらに首長一族は資本家と結託し、子弟を学校教育に送り込んでいる。また中央国家は、地方政府とは別に、じょじょに経済的な債務関係を利用して経営の中核に入り込み、資本家を駆逐しプロジェクトの母体になろうとしている。

ウェイト川流域周辺では、政治・経済・文化の流れが、複雑な形でぶつかり合っている。エチオピア周辺の農牧民たちは、20世紀の100年間も、国家の支配に対して、「伝統的」価値を構築・維持することで抵抗を続けてきた（宮脇 2006）。だがウェイト川流域で見られる抵抗の諸戦術は、もはやこのような集団的「伝統」の構築という形の抵抗ではない。農牧民たちは、失った放牧地や川辺林などの生態学的資源を埋め合わせるために、あらたな文化・経済的な諸手段を取り入れ、伝統的な生業様式と組み合わせようとしている。ここにみられるのは、急激にグローバル化する世界に見合った、同化でも離反でもない、新しい戦術の生成である。そしてこうした戦術は、プランテーションの国家との関係とも、密接に関連して生成しているのである。

本稿ではこれら一連のプロセスの中でも、ことに、1996年に生じた、地元民の開発プロジェクトに対する武力抵抗に焦点を絞り、その社会的背景と経過、および結果を示すことにより、地元の多様な集団が開発プロジェクトに対してとる対応と、生存の戦術の一環を明らかにしたい。

以下、第2章では、まず綿花プランテーション周辺の民族分布を概観した後に、ツアマコの地域集団・社会構造・親族組織、および首長筋についての背景的知識を提示する。さらにプランテーション設立の背景について述べる。

第3章では、1996年に生じたツァマコの地域集団 Duma のプランテーションに対する襲撃の原因について、地元の地域集団 Duma と Unchete が当時おかれていた状況と、プランテーション設立を後押ししていた当時の首長の政治戦略を背景に、分析を加える。

第4章では、Duma によるプランテーションの襲撃と、政府による襲撃鎮圧について記述した後、地域の政治状況がどのように変化したのかを示し、そこに地元集団のさまざまな戦術が見られることを明らかにする。

終章では、これらの集団の対応の違いには、民族集団内における位置と外部世界に対してとってきた政治戦略の相違、および開発が生態資源に及ぼすインパクトの相違など、複数の要因が関係していることを示す。また武力蜂起という事件は、それ以降のプランテーションの定着と拡大のプロセスに置いて、それぞれの集団の適応の在り方に、よりいっそう対照的な結果をもたらしたことを明らかにしたい。

第2章 調査地の背景

本章では、プランテーション周辺の民族分布と、Tsamako の社会組織、およびプランテーション設立の背景について見ていく。はじめにプランテーション周辺の民族分布を、Tsamako を中心として概観する。次いで Tsamako の地域集団・社会構造・親族組織について説明する。なかでもプランテーションの設立と密接なかかわりをもつ首長筋について、詳しく述べることにする。最後に、プランテーション設立の経緯と、それが地域に与えたインパクトについて述べる。

第1節 プランテーション周辺の民族分布

Tsamako は Weito 川西岸の標高 500 メートルの沖積平野と、その西側の標高 2000 メートルほどの山岳地帯に居住しているクシ系農牧民で、人口は 1 万人弱である(図 1)。²Tsamako の北の山岳地帯には、人口 5 万人弱のオモ系農耕民 Maale が分布する。Tsamako と Maale は、1960 年代に対立し、相互にレイディングを行っていた。Tsamako の西の山岳地帯には、オモ系農牧民 Banna が、さらにその南には、Omo 系農牧民 Hamar が分布している。この二つの民族集団は、言語も慣習も非常に似通っており、二つの集団をあわせた人口は、4 万人ほどである。Tsamako の北方の地域集団は、Banna と通婚関係をもっており、南方の地域集団は Hamar と通婚関係をもっている。Tsamako の南の Weito 川の河口地帯に近い低地には、人口は 4 千人弱のクシ系農牧民 Hor が分布する。Tsamako の首長筋は、Hor のテリトリー内に居住しており、Tsamako から嫁をとり、娘を Hor に婚出させるという、母方の交叉イトコ婚を行なっている。

Weito 川を挟む東岸の沖積平野とその東側の山地には、人口 14 万人ほどのクシ系農牧民 Konso が分布しており、Tsamako と川を隔てて接する Weito 川東岸低地平野には、その地域集団のひとつである Kolme が居住している。エチオピアが社会主義政権となる 1970 年代初頭から、プランテーションが設立される 1990 年代初頭にかけて、Tsamako と Kolme は敵対関係にあり、相互にウシをレイディングしていた。

² 1994 年に実施された人口調査によれば、Tsamako の人口は 9,408 人となっている (Central Statistical Authority, 1996)。

Wetio 川が山岳地帯から沖積平野に流れ出すあたりの数キロメートル北には、Ongota という採取農耕民が居住する。Ongota は人口 100 人ほどの小集団で、Birale という他称で知られている。主として漁労、蜂蜜採取、河辺での農耕によって生活し、独自の言語を話してきたが、近年では Tsamako との通婚が盛んであり、言語や社会制度も Tsamako に同化しつつある。

エチオピアの行政区分は、上から順に、州 (Region)、ゾーン (zone)、郡 (wäräda)、行政区 (k'äbäle) という形で階層化されている。ここで述べた民族集団は現在、すべて Awassa に行政政府を持つ南部諸民族州 (Southern Nations, Nationalities and Peoples Region) の管轄下にある。その下の行政区分では、これらの民族は Jinka に行政政府を持つ南オモ・ゾーン (Dehub Omo zone) に属し、さらに Tsamako は、Banna、Hamar、Hor、Ongota とともに、Hamer-Bena 郡に属している。

第 2 節 Tsamako の地域集団、社会構造、首長筋

(1) 地域集団と社会構造

Tsamako の居住地域には年 2 回の降雨があり、3 月から 7 月が大雨季、11 月が小雨季となっている。Weito 川の西岸の低地では、ウシ、ヤギ、ヒツジの牧畜と、天雨によるトウモロコシ栽培が行なわれている。さらに Weito 川河岸では、小規模な氾濫原農耕と、河辺林の中の湿地を利用した農耕が行なわれる。山岳地帯では、気温が低く牧草が少ないために、牧畜は低調で、天雨を利用した農耕が主となっている。トウモロコシ、モロコシ、小麦、テフなどが栽培されている。

Tsamako は耕作地をいくつかに分類しており、天水の畑では、傾斜地から流れ込んできた水を集めた畑を balale、天水のみの畑を gofko と呼んで区別している。また氾濫原の畑を worko、河辺林の畑を buulo と呼ぶ。

Tsamako は行政上は、南から Bura、Bola、Gisma、Olo、Gone、Duma、Unchete、Shala、Aimale の 9 つの行政区から成っており、それぞれの行政区には、郡から任命された長 (Tsamako, sarku; Amharic, lik'ä mämbär) がいる。これらの行政区はまた、民族的な政治単位である地域集団ともほぼ一致している (図 2)。

地域集団 (ganda) は、年齢階梯の儀礼を行なう単位であり、中心となる年齢組から、その集団を政治的に指導する長老たちが選ばれる。Tsamako の年齢階梯 (haira) では、数十年に一度、nyarko と呼ばれる年齢組形成の儀礼が行なわれ、そのときに形成された新たな年齢組が、年齢階梯の中心となる。階梯自体には、名前が付けら

れてはいない。現存している年齢組は、古いものから順に、Nelbasko、Roobalko、Bilbilko と呼ばれている。³現在の長老たちは、Bilbilko から選ばれている。年齢組に加わっていない青年たちは、morko と呼ばれる。

(2) 親族組織

Tsamako には、Elako、Algako、Amado、Barito、Ezmako、Regako、Ozubiko という7つの父系外婚クランがある。それぞれの由来は、地域集団によって語られ方が異なっている。例えば Olo では、Regako を除くすべてのクランは Gawada から来ており、Regako だけが Borana 由来の集団だという。⁴一方 Duma では、Barito は Borana から、Ozbiko は Gawada から、Algako は Arbore (Hor) から来たと言われている。

クランの中で、特に親族関係のはっきりしている集団、また相互扶助を行なっている集団を gafko という。gafko は地域集団をまたいで分布しており、婚姻のときの婚資の調達や、通過儀礼の開催、移住の時の寄寓先として、相互に助け合う。gafko は事実上の親族関係にもとづくだけでなく、便宜に応じて柔軟に形成される。通過儀礼の時に、他の地域集団から参加を許された親族集団が、その主催集団と gafko 関係をもち、他の機会に援助を提供したりするのである。

(3) Tsamako の首長筋

1. 首長集落

Tsamako の首長は bogolko と呼ばれている。Tsamako はこの首長が、強力な呪詛の力と、雨をもたらす力を持っていると考え、とても畏怖している。Tsamako の南の民族集団 Hor も同様に、この首長筋に強力な呪詛と祝福の力を認め、自分たちの首長のひとりであるとみなしている。Tsamako の地域集団は、首長の力により自分の集団のテリトリーに豊饒をもたらしてもらうために、毎年貢納を贈っている。⁵

³ Nelbasko より以前の年齢組としては、古い順に Baasarko、Gurmarko が記憶されている。

⁴ Gawada は Tsamako の北東の山岳地帯に分布する人口3万ほどのクシ系農耕民。Tsamako と同系統の言語を話し、通婚関係もある。Borana は Tsamako の東に分布するクシ系牧畜民。

⁵ 例えば Duma では、未經産のヒツジ1頭、蜂蜜を2つのヒョウタン分、モロコシを6袋貢納する (Dulo Wale, Nelbastako, Algatako, Duma, 2008年1月3日)。

首長筋は Barito のクランに属し、その祖先の名称から Asaso 一族 (ganda Asaso) と呼ばれている。⁶彼らは Tsamako と Hor の居住域の中間に、首長集落 (ganda bogolkilo) を形成し、集住している。筆者はこの首長筋の調査のために、1990 年に首長集落に滞在したことがある。その集落は Kuile と呼ばれる場所にあり、Hor 最大の地域集団 Gandarab の北 6 キロ、警察の駐在所や小学校のある Erboire という人口が数百人ほどの小さな町の北 4 キロのところに位置していた。

Kuile の集落は、多くの点で他の Tsamako の集落とは、異なった印象を与えるものだった。第一に、Tsamako のほとんどの集落が散村であるのにたいして、Kuile は家々がびっしりと密集した集村形態をとっていた。第二に、そこに見られる家屋も、ほとんどが Tsamako の家屋のスタイルではなく、Hor の家屋のようなつくりをしていた。⁷そしてそこに暮らす人々も、Hor のような衣装を身に纏い、言葉も Tsamako 語と Hor 語の両方が話されていた。

Weito 川の川べりには広大な氾濫原があり、そこでモロコシが栽培されていた。3 人の Tsamako の長老が、mura として氾濫原の分配にあたっていた。⁸またウシを飼養している放牧キャンプが、Hor と Tsamako のテリトリーの間を遊動していた。

Kuile には 75 戸の世帯があり、人口は 372 人だった。住民は、Tsamako、Hor、首長筋である Asaso 一族という 3 つの主要な集団からなっていた。Tsamako 世帯は 27 戸 (36.0%)、Hor 世帯は 27 戸 (36.0%)、Asaso 一族の世帯は 17 戸 (22.7%)、その他 Borana と Amhara の世帯が 4 戸 (5.3%) だった。

伝承からみると、この首長集落は、形成時から、エチオピア帝国支配の初期を除き、ずっと Tsamako と Hor の境界領域に位置し、その場所を細かく移動していたと思われる (宮脇 2009)。筆者の調査した 1990 年には Kuile に位置していたが、1991 年の Borana の Hor への襲撃後に分裂した。そして当時の首長を含む Asaso 一族の一部は、Erboire の町のすぐ北に移住し、残りの親族は、Garsante Durba という Kuile の

⁶ Hor からは、Asaso 一族は Gandarab の首長筋と同じ Olmok クランに属し、そのうちの Asaso リネージ (wari Asaso) と呼ばれている。

⁷ Tsamako の家は、直径 5m、高さ 3m ほどの丸型の草葺の家で、周囲は木を杭のように立てて簡単な壁になっている簡素なつくりである。Hor の家は、直径 8m ほど、高さ 5m ほどのドーム型の母屋に、縦横高さが 5m・3m・1.5m ほどの直方体の前室がついている。母屋は葦でびっしりと覆われており、前室は、外から内部は見えないが風通しのよいように木の枝で覆われている。

⁸ Tsamako および Hor で、氾濫原を各世帯に分配する役職のことを mura と呼んでいる。各地域集団の中心となる年齢階梯から選ばれる。

北 8 キロの土地に移住した。当時の首長が死んだ後、首長位は Garsante Durba に住む後継者によって引き継がれた。そして Garsante Durba が首長集落となり、今日に至っている。

2. 首長筋の由来

Tsamako の首長集落がいかなる由来を持ち、いかにして Tsamako と Hor の居住域の間に位置するようになったのかについては、いくつかの異なる伝承がある（宮脇 2009）。首長筋の始祖は Segen 川から下って Tsamako の土地に至り、そこの最初の住人となったというもの、Konso の首長筋から出て Tsamako の土地を訪れ、そこで干ばつに苦しむ住民を救って首長となったというもの、もともと Tsamako の首長筋の始祖は Hor の首長筋の始祖と兄弟関係にあり、それぞれが旅の途中で Hor と Tsamako に定着し、首長となったというものなどである。

この首長筋の由来について最も興味深い伝承は、私が Hor の Gandarab 地域集団で聞いたものである。それによれば、現在の Hor と Tsamako の境界に最初にやって来た首長筋の祖先は、若い女性であった。彼女は当時 Duma にいた Tsamako の首長の第二夫人で、第一婦人と不仲だったためにその集落から出奔したのだった。彼女は Hor の地域集団 Gandarab の首長筋である Jabie リネージの男性の愛人となり、その子供を産んだ。子供は頭にダチョウの羽をつけて生まれたという。これはこの子供が、生来の強力な呪詛の力を持っていることを表している。⁹子供は Arshal Shada と名づけられた。彼は成長し、母親が Tsamako の首長集落から追い出されたことを知って怒り、Tsamako の土地に強い呪いをかけた。そのために Tsamako は早魃に襲われ、大変な苦難を味わった。長老たちが Arshal の噂を聞きつけ、宥めるために未經産のヒツジを連れてきてみると、噂にたがわぬ強力な力を持つ男であることがわかった。そこで彼を Tsamako の首長にすることに決めた。Duma の首長はその地位を追われ、Arshal が新たな首長となったのだった。

この伝承が Hor にとって（そして Tsamako の首長筋にとっても）重要であると思われるのは、Tsamako の首長筋が Hor の首長筋と同一の起源をもつことを強調することで、そのメンバーが Hor の年齢階梯組織に所属し、その決定に従うという規範

⁹ Hor では若い男性の頭に白髪があることを、呪力の現れの一つとみなしており、この子供がつけて生まれたというダチョウの羽は、戦士が敵を殺したときに頭につける装飾を表すと同時に、呪力の現れである白髪も象徴している。

の正統性を示唆しているように思われる点である。事実 Tsamako の首長筋のメンバーは、Hor の年齢階梯制に所属しており、地域集団におけるさまざまな政治的決定や氾濫原の分配に関しては、隣接する Hor の Gandarab 地域集団の長老階梯の決定に従うものとみなされていた。そしてこのことが、後に見るように、1980 年代当時の Tsamako の首長 Dale Armar と Gandarab の長老集団の間に、政治的な葛藤をもたらし、Dale が自らの権力の支持基盤を求めて、プランテーションに接近する遠因ともなったと思われるのである。

3. 首長筋の婚姻について

Tsamako の首長筋は、Tsamako から嫁を取り、Hor に娘を婚出させる。私が 1990 年に首長集落で行なった調査によれば、首長筋の男女の関わっている 52 組のカップルのうち、30 人の女性が首長筋に婚入し、そのうち 29 人が Tsamako の出身、1 人が Borana の出身だった。また 22 人の女性が首長筋から他集団に婚出し、そのうち 18 人が Hor の地域集団である Arbore へ、4 人が Tsamako へ婚出していた。

このような婚姻は、婚姻ルールに従って自動的に行なわれるわけではない。首長筋の男性は、呪詛の力を用いて力づくで、Tsamako から嫁をとるのだといわれる。嫁を欲しいと思う首長筋の男性は、自分の友人のいる Tsamako の地域集団に赴き、ダンスなどに参加して、お気に入りの娘を探す。娘が決まると、彼は夜中にこっそりと、その娘の家の前に首長筋の象徴である木の棹 (walkitte) を立てておく。この棹を立てられると、いかに娘が嫌がろうとも、地域集団の長老たちはその娘を首長筋に嫁がせる (Tsamako の娘は首長筋に嫁ぐことを嫌がるといわれている)。なぜなら、そうしなければ、棹から呪詛の力が発現し、周囲に疫病を撒き散らしたり、旱魃をもたらしたりするからである。長老たちは娘を首長筋に与えるという知らせを送り、娘の兄弟が娘を首長集落に連れて行く。

地域集団のうちで、首長の就任儀礼で特別な役割を演ずる Olo と Bura のみが、首長筋との婚姻をまぬがれている。これら二つの集団は、首長筋よりも「年長」であり、首長筋の「父親」のようなものとみなされているからだという。

また 1990 年の調査では、地域集団によって、首長筋との婚姻の頻度が大きく異なっていた。首長筋が頻繁に通婚をするのは、Gisma までの地域集団であり、その北隣の Duma 以北の集団とは、通婚はほとんど行なわれていなかった。Gisma は首長集落から約 30 キロのところであり、徒歩により 1 日で到達可能な地域である。伝統

的な首長の影響力は、少なくとも 1980 年代までは、物理的な距離によって、強く規定されていたのである。

4. 首長集落居住世帯の資源利用戦略

すでに述べたように、1990 年の首長集落には、首長筋である Asaso 一族のほかに、Tsamako の世帯、Hor の世帯が居住していた。Tsamako 世帯の多くは、1980 年ごろに首長集落に移住してきているのに対して、Hor の世帯は、特定の時期に集中することなく、比較的コンスタントに移住をして来ていたが、それは利用する生態資源が異なっていたからだった。

Tsamako の集中的な移住が行なわれた 1980 年は、Weito 川が大規模に氾濫し、Hor のテリトリー内にある Burkicha という場所に広大な氾濫原が出現した年で、首長集落の住民はその年を、「Burkicha のとき (gize Burkicha)」として記憶していた。地形上、大規模な氾濫が生じにくい Tsamako のテリトリーに生活するものにとっては、Hor の肥沃な氾濫原は、年に 2 回、比較的安定した収穫を得られる、貴重な生態資源である。Tsamako 住民の多くは、この氾濫原での耕作を目的に、首長集落に移住してきたのである。

それに対して Hor の住民は、所属集団の Gandarab ですでに氾濫原の分配を受けており、農耕のための資源をえるという意味での魅力は首長集落にはない。Hor のテリトリーで問題となるのは、むしろ放牧地である。なぜなら Weito 川下流の Hor のテリトリーでは、雨季に大規模な氾濫が起きるため、放牧キャンプはそれを避けて、氾濫の届かない地域に移動しなければならないからである。南は雨季には巨大な冠水地となってしまうし、Weito 川の東岸は Waata のテリトリーで、その背後には Borana がいる。そして当時 Borana との関係は、若者同士の小競り合いが続き、緊張の度合いが高まっていた。北の Tsamako のテリトリーは、だから、Hor にとって魅力のある放牧地だった。Hor の住民が首長集落に居を構えるのは、北へウシを追う放牧キャンプのための前進基地という意味合いがあったのである。Hor の住民がこの時期に一定の割合で移住をしているのは、こうした放牧キャンプの動きに合わせていたからだろう。そしてやってきては、一定の時期そこで過ごし、ふたたびそこを去る、というようなパターンをとっていたものと思われる。

このように、それぞれの集団は、それぞれの経済的な目論見をもって、首長集落に居住していたのだが、首長集落への移住には、首長の許可が必要だった。当時の

首長は、年齢 50 歳ほどの Dale Armar という男であり、彼がこの集落に来る Hor や Tsamako に、滞在の許可を出していたのである。氾濫原の分配は、Tsamako の移住者が分配役 (mura) となっていって行なっていたが、Hor のテリトリー内の氾濫原に、Tsamako が勝手にアクセスできるわけではない。これも首長の認可があって初めて可能になっていた。また Hor が Tsamako のテリトリーで放牧するときにも、首長への口利きの依頼は必要だった。Tsamako と何かトラブルがあった場合は、首長が仲介をするからである。このように、1980 年代当時の Tsamako の首長 Dale は、政治的にも Tsamako と Hor の間を仲介する権力者として、首長集落に移住する両集団のメンバーの便宜を図っていた。

だがこのことは、Gandarab との間に、問題を起こすことになった。なぜならすでに述べたように、首長筋のメンバー自体、Tsamako ではなく、Hor の地域集団である Gandarab の年齢階梯のメンバーであり、Hor から見れば彼らも Gandarab の長老集団の支配下にあるものとみなされていたからだ。Gandarab の長老たちは、資源の分配も、当然 Gandarab の長老集団の命令に従うべきものと考えていたのである。

第 3 節 綿花プランテーション

(1) Birale Cotton Plantation の設立の背景

エチオピア西南部低地は、中央からの交通の便が悪かったために、商業的綿花栽培は 1980 年代になるまで行なわれなかった。この地域で最初に開発された商業プランテーションは、1980 年代後半に、ケニア・スーダンの国境近くを流れる Omo 川の下流 Omo Rate に開かれた、国営綿花プランテーションである。これは当時の社会主義政権下で、北朝鮮の援助を受けて、開発されたものだった。だが採算があわなかったために、1990 年代前半には、早くも大部分が閉鎖された。

エチオピア西南部低地で綿花を栽培するには、潤沢な灌漑用水を確保することが第一条件となる。灌漑用水を供給することのできる河川として、この地域では、Omo 川のほかに、その東を流れる Weito 川がある (図 1)。Weito 川で綿花プランテーション開発が行なわれたのは、1990 年のことだった。

プランテーション開発を行なったのは、G という農業エンジニアだった。¹⁰彼はエチオピアの Almayo Agricultural College を卒業後、英国で修士の学位を取得し、長

¹⁰ 以下本文中に登場する人物で、現存する者の名前は、すべて仮名とした。

年 Awash で農業技術者として働いた。¹¹また FAO の専門家として Konso の Masoiya でも働いた経験がある。¹²

ソ連崩壊後の 1990 年に、エチオピア社会主義政権は社会主義と資本主義の混合経済政策を宣言し、企業による資本投資を募っていた。G は M という裕福なエリトリア人から資金を得て、Weito 川周辺の調査に乗り出した。彼が Weito 川周辺を候補地とした理由は、北東の綿花栽培適地である Awash 渓谷はすでに大部分が開発されており、また南西の綿花栽培適地 Omo 川は、中央からあまりにも遠かったためであるという。そこで未開発であり交通の便も比較的良い Weito に目をつけたのである。¹³またこの地域の生産性が、商業的綿花栽培の中心地である Awash に比べて、格段に高いと考えられたこともあっただろう。¹⁴G はエチオピアおよび英国の調査機関を使い、この地域の土壌が綿花栽培に適していることを確認すると、当時の南オモ・ゾーンの行政長官から開発の許可を得て、Weito 川西岸、自動車道の南側に、小規模なプランテーションを開いた。プランテーションは、Weito 川上流に住む少数民族 Birale（自称 Ongota）の民族名をとり、Birale Agricultural Plantation と名づけられた。

Birale Agricultural Plantation は、当初わずか 50ha の土地からスタートした。G は南オモ・ゾーンの行政官や、ハマルーバンナ (Hamar Banna) 郡 (wārāda) の行政官だけでなく、地元の住民である Tsamako の行政区長 (lik'amāmbār) にも、プランテーション開発の許可を得ようと試みた。プランテーションが開発される地域には、Duma と Unchete という二つの地域集団があった。Unchete の行政区長は開発に異議を唱えなかったが、Duma の長は強い抵抗を示した。G は Tsamako の首長 Dale に接近し、彼を通して Duma の行政区長を説得しようとしたが、Duma の行政区長はプランテーション開発に対して、否定的な見方を変えようとしなかった。¹⁵

プランテーションはブルドーザーなどの大型建設機械を用い、Weito 川にダムと取水口を建設し、灌漑用水路を西岸に引いた。そして Weito 川の河辺林を伐採し、

¹¹ Getachew Mulgeta, 2004 年 12 月 19 日。

¹² Gezahegn Haile, Production Manager, Omo Valley Agro-industry, 2007 年 3 月 9 日。

¹³ Getachew Mulgeta, 2004 年 12 月 19 日。

¹⁴ Awash の綿花の生産高は、21~22quintal/ha であるのに対して、この地域では 35.5quintal/ha の収穫がある。Gezahegn Haile, 2007 年 3 月 9 日。

¹⁵ Wado Aike (名前), morkito (年齢組), Algatoko (クラン), Olo (出身地), Tsamako (民族名), 2007 年 12 月 18 日、他。以下 Tsamako のインフォーマントの属性は、上記の順で記載。

耕作地を拡大していった。また G は、ゾーンの中心地 Jinka と、州の中心地 Arba Minch 間の 200km の幹線道路も、プランテーションの資金を用いて整備した。さらに 1995 年には、プランテーションの北側に、季節労働者が居住するための町を建設した。経済の資本主義化を進める新政権は、このプランテーション開発を、エチオピアの地域開発のモデルとして賞賛したという。¹⁶

プランテーションの設立は、いくつかの面で地元の Tsamako 社会にインパクトをもたらした。一つは、プランテーションの拡大に伴う生態資源の減少である。耕作地の拡大に伴い、Tsamako は放牧地から締め出されていった。また河辺林の伐採や農薬の使用によって、Tsamako の主要な生業のひとつである養蜂を、Weito 川の近辺で行なうことは不可能になった。また増加するプランテーションの労働者は、その地域に豊富にいたガゼルやオリックス、エランド、ダチョウなどの野生動物や、Weito 川の魚を、根こそぎ取りつくしてしまった。

他方でプランテーションの設立は、Tsamako にとって新たな生存手段を獲得したり、社会関係を構築する場を提供した。プランテーションは地元の Tsamako に、プランテーションの用水路を利用した灌漑耕作地を分配し、ウシの給水地を提供した。これらは Tsamako にとって、失われた生態資源に代わるあらたな資源となった。だがこのような便宜は、二つの地元集団にとって同様に好ましいものであったわけではなかった。

(2) Duma の蜂起とその後

Unchete と Duma はプランテーションの一部に灌漑耕作地を与えられていたが、1995 年、プランテーションが耕作地を拡大するために、灌漑耕作地の移転を迫ると、プランテーションにかねてから不満を募らせている Duma の住民によって、事件が勃発した。綿花畑に入ろうとする Duma の仔牛をプランテーションの守衛が撲殺したことをきっかけに、Duma の集団が、プランテーションを銃撃したのである。この銃撃により、8 名の高地人技術者が死亡した。Jinka と Arba Minch からすぐさま警察と軍が派遣され、容疑者たちが拘束された。そして Duma の長を含む 8 人の Tsamako が、公的な裁判を経ることなく、秘密裡に銃殺された。

¹⁶ Gezahegn Haile, 2007 年 3 月 9 日。

これ以降、Weito の町には多くの警官が駐留するようになった。Weito にはさらに、小学校やクリニックも建設された。他方でこの事件の後には、Tsamako 側からは表立って武力抗争に訴えようとする動きは、なくなった。

当初資金を提供していた M は、エチオピアーエリトリア間に戦争（1998-2000）が勃発すると、エチオピアから強制退去させられた。プランテーションはそれ以降、資金をエチオピア商業銀行（Commercial Bank of Ethiopia）の融資によることになった。当初経営は順調で、生産した綿花を国内、国外（ヨーロッパ、アジア）に販売し、1億1千万ブル（1birr=8USD）の負債は4年で返済したという。¹⁷

しかし2001年に綿花の国際価格が下落すると、経営が困難になっていった。Gはオイル・パームの導入を試み、エチオピア商業銀行の行員をインドまで連れて行き、プランテーションでも実験的に栽培を開始した。その成績は非常に良かったというが、商業銀行は融資を拒否し、プランテーションの資金繰りは困難になった。¹⁸そして2002年、プランテーションはエチオピア商業銀行に設備を差し押さえられ、操業を停止した。

3年間の操業停止後、この耕作地と設備は2006年に、Awashに綿花プランテーションを持つ Amibara Agricultural Development Enterprise に対して、10年間2000万ブルで貸与された。プランテーションは、Omo Valley Agro-industry と改名され、2008年現在まで営業中である。

¹⁷ Getachew Mulgeta, 2004年12月19日。Gのもとで長年働いた農業技術者も、Gが最初に融資を受けたのは、商業銀行であったという。実際は開発銀行のほうが利子は安いのだが、Gが融資元を商業銀行にした理由は不明だという（Gezahegn Haile, 2007年3月9日）。他方融資元のエチオピア商業銀行フィンフィネ（Finfine）支店の担当者によれば、エチオピア商業銀行がこのプランテーションに関わったのは、1995年であり、エリトリア戦争開始以前であるという。当初8000万ブルを融資し、返済金は利息とあわせると9500万ブルとなった。プランテーションは、開業当初はエチオピア開発銀行（Development Bank of Ethiopia）から1億ブルの融資を受け、それに加えて自己資金を1億ブル出資していたという（Simeon Assefa, Manager SMEsandAgricultural Loans Division, Commercial Bank of Ethiopia, 2007年2月22日）。

¹⁸ Getachew Mulgeta, 2004年12月19日。それに対して、商業銀行の担当者によれば、綿花の値段はプランテーションへの融資当初、1200USD/トンで売っていたが、じょじょに価格が下がり、600USD/トンにまでなった。国内でも当初、1000birr/quintal（100kg）で売っていたが、こちらも価格が下がっていった。プランテーションの生産コストは3200birr/haであり、生産量は30quintal/ha。96～97年には相当な利益を出していたが、2001～2002年には損益分岐点を越えたという（Simeon Assefa, Manager SMEsandAgricultural Loans Division, Commercial Bank of Ethiopia, 2007年2月22日）。

次章以下では、プランテーションに対するそれぞれの集団の対応を、その政治的・生態学的背景をもとに、より詳しく分析することにしよう。

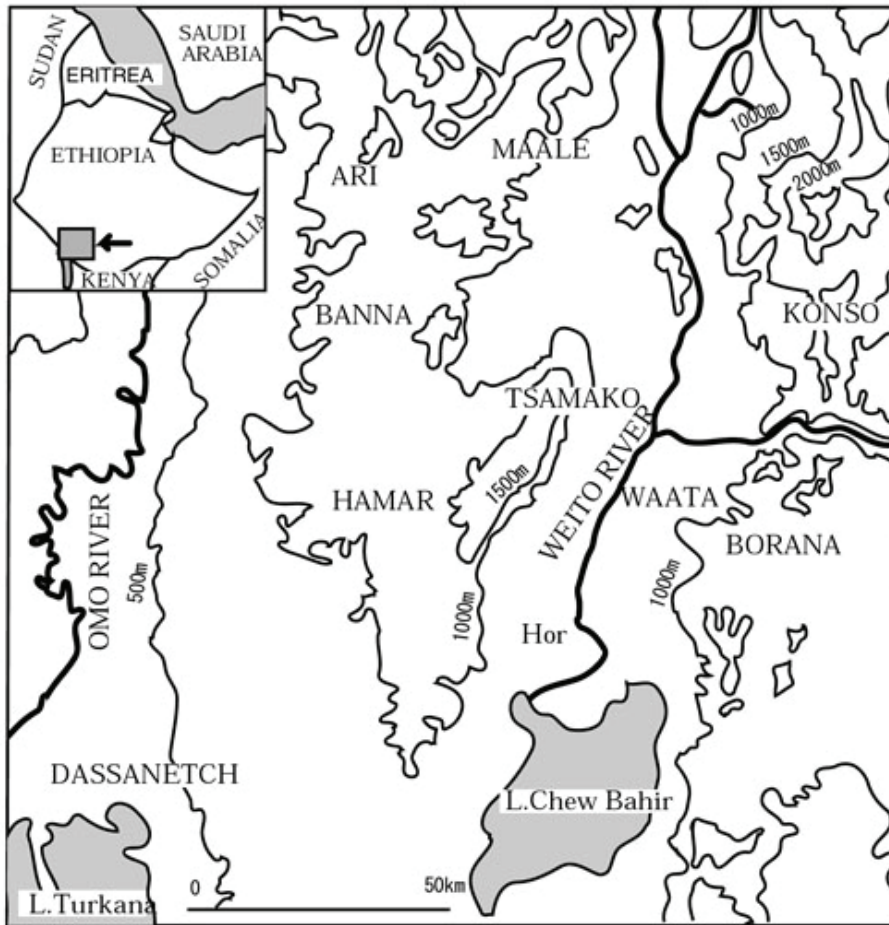


図1 エチオピア西南部ウェイト川周辺

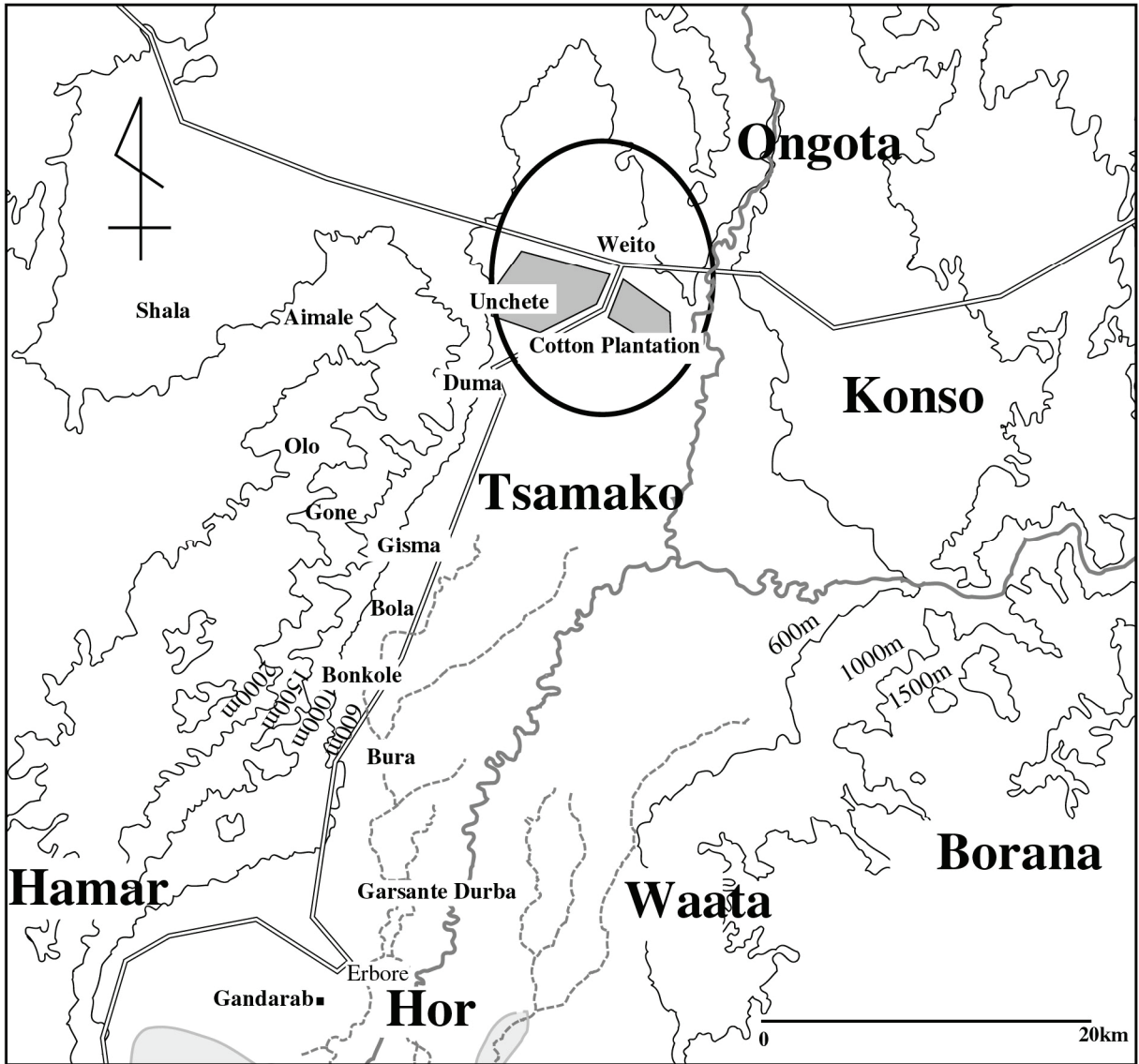


図2 プランテーションと周辺民族・Tsamakoの地域集団

第3章 プランテーションをめぐる葛藤

本章では、プランテーションに対する地域集団 Duma の武装蜂起が生ずるまでの経緯を述べる。第1節では、プランテーションがこの地域に定着するに際して重要な役割を演じた Tsamako の首長が、どのような政治戦略のもとにこの地域で権力基盤を築いていたのかについて述べる。第2節では、プランテーションの直接影響かに置かれることになる地域集団 Duma と Unchete の歴史的背景について概観する。第3節では、プランテーションの拡大にともない、地域集団間、および地域集団とプランテーション間に、どのように葛藤が生じたのかについて見てゆく。

第1節 Tsamako 首長の政治戦略

1990年に私が滞在していた首長集落 Kuile は、Asaso 一族、Hor、Tsamako の世帯が密集し、とても賑やかな雰囲気集落だった。事実当時の75世帯372人という人口は、Tsamako や Hor の小規模な地域集団に迫るほどの数であった。当時の首長は、Dale Armar という50歳くらいの男だった。長老たちは毎朝首長である Dale の家に集まり、丸いヒョウタンを半分に割ったボウル型の巨大なカップで薄いコーヒーを飲み、神に祝福をささげていた。Dale は集落内だけでなく、4キロほど南に位置する Erbore の町の住民にも影響力を持っているように思えた。Konso 商人たちの経営する町の酒場の入り口には、彼が持ち歩いているバターを塗られた棹（首長の象徴である）が、しばしば立てられていた。しかし彼は酒代を払っているようにはみえなかった。以下に、Dale がこのような影響力を持つようとした背景には何があったのか、彼はいかにして影響力を持つにいたったのか、そしてそれが、Tsamako と Hor の民族間関係にどのような結果をもたらしたのかを明らかにする。

前章で述べたように、Tsamako の首長筋は、政治的には Hor の地域集団 Gandarab の年齢階梯に所属している。地理的にも首長集落は Gandarab に近接しており、つねに Gandarab の政治的影響下にあった。Gandarab は Hor の最北の地域集団であり、エチオピア帝国の支配以降、政府の政治支配の影響をもっとも強く受ける地域だった。エチオピア国家に編入されて以後、Hor の実質的な支配者は、政府と地域をつなぐ仲介者（現地住民出身で、政府に地域の統括者として任命されたものを、Amhara 語で ch'ik'a shum、Hor 語で shoomi と呼んだ）となった。そして強力な仲介者は、つねに Gandarab の出身者だったのである。

このような政治的状況は、Hor の地域集団間や地域集団内でも、複雑な権力闘争を引き起こした。首長の伝統的権力を護持しようとする者がいる一方で、仲介者としてのポジションを争おうとする者たちもいた。帝政の末期には警察の駐屯地が Gandarab の近くに作られ、Derg 時代にはそれが Erbore の町となり、国家権力の存在がより可視的となっていた。Derg 社会主義政権が崩壊し EPRDF 政権になってからは、政府だけでなく、NGO やプランテーションも利用可能な外部の政治経済的資源となり、かけひきはより複雑になっていった。

Dale はこのような権力闘争に、積極的に参加していった。もともと彼は Tsamako の首長として、政府によってこうした仲介役に利用される立場にあった。Derg 時代には、Key Afer に本部を置く郡の行政官に連れられて、Tsamako と Konso の間の紛争の調停に参加していた。だが Dale はそれだけでなく、みずからも積極的に、こうした仲介者としての影響力を伸ばそうと試みた。例えば彼は、1980 年ごろに Erbore の町に移住してきた Konso の商人たちに、当時 Hor のテリトリー内に出現した広大な氾濫原 Burkicha を耕作地として使う許可を与えた。その代わりに Konso 商人は彼に、Konso 商人の通商ネットワークの管理組織である funno に加入させたのである。こうして Dale は、Erbore の町に移住してきた Konso 商人たちに、影響力を持つようになったのだった。

他方でこのような Dale の振る舞いは、Gandarab の長老集団から強い批判を浴びることになった。Hor の北方の氾濫原は、Gandarab 地域集団の管轄下にあり、それを分配するのは Gandarab の分配役の長老たち (mura) だった。Hor では当時、年齢階梯の中心となっていたのは Oggalsha という世代組であり、長老集団はすべて Oggalsha から選出されていた。だが Dale はこの世代組の一つ下の世代に属しており、(年齢的には 40 代となっていたが) Hor ではまだ、未成年階梯 (morko) にあるとみなされていたのである。

Gandarab の長老集団と対立していた Dale は、Kuile を Gandarab に対抗してみずからの政治的影響力を拡大するための基盤にしようとしていたのだと思われる。Tsamako と Hor の間には、もともと、首長筋を通じた婚姻関係を除いたら、交易関係も、ボンドパートナー関係もなかった。それどころか、Hor は Tsamako との直接の婚姻を、タブーとしていたし (Tsamako の女性を娶ると、その男性の栽培する穀物は不作となり、飼養する家畜は減少し、子供もできず、本人も短命となると考え

られている)、Horの南部の地域集団であるMarleは、Daleの2代前の首長であるShada Guitaleの時代(1950~60年代)には、Tsamakoと戦うことさえあったという。

DaleはTsamakoの耕作者にHorのテリトリー内で氾濫原を耕作することを可能にし、またHorの放牧キャンプがTsamakoのテリトリー内に入ることを可能にした。そしてトラブルが生じた場合には、積極的に仲介した。¹⁹このようにして、Daleは首長集落に、TsamakoとHorを呼び寄せて、みずからの影響下に置いたのだった。

Daleのこのような戦略は、結果的にHor(とくにGandarab)とTsamakoの間の交流を促進することになった。現在ではHorとTsamakoの間で、ボンドパートナー関係を結ぶ者も増えている。だがDaleの戦略が集団間の調停ではなく、Gandarabに対抗し、あくまで自分の影響力の増大を目的としていたことは、以下のような首長筋を媒介とした婚姻関係の変更にかがうことができる。

Dale以前の首長のもとでは、首長筋がTsamakoから嫁を娶り、娘をHorに婚出させるということは、自明のこととされていた。だがDaleは、首長筋が一方的に娘をHorに婚出させることは割に合わないと考え(Horでは、結婚前の娘は婚資と交換される最も貴重な財であるとみなされる)、自分の娘の何人かをTsamakoに婚出させた。さらに盟友のKonsoに婚出させようともした。さらにHorの少女が、首長筋の男性と結婚することも認めようとした。だが首長筋の男性は、割礼を受けていない女性と結婚することが慣例であり、そのために結婚時にはみずからの家で割礼を受けてから婚出するHorの少女は、駆け落ちする形で割礼を受けないまま首長集落に来ることになった。これはHorの伝統を否定することであり、Gandarabの住民から批判を受けることになったのである。

このようにDaleは、みずからのポジションを利用して、さまざまな集団の仲介を行なうことで、政治的な影響力を高めようとした。そしてそのためには、新たな集団と手を組んだり、従来の慣習を変更したりすることも、ためらわなかったのである。次に、プランテーションが設立されたUncheteとDumaの地域集団に目を転じてみよう。

第2節 プランテーション設立以前のUncheteとDuma

¹⁹ 例えばTsamakoテリトリー内のHorの放牧キャンプが、牧草の減少を嫌うTsamakoによって放火されたときは、DaleはHorの放牧者の訴えを聞き、Tsamako側に去勢牛を提供させ、供犠をして、調停をしている。

Gがプランテーション設立のためこの地域に来たDerg政権の末期、Tsamakoは対岸に居住するKonsoの一集団であるKolmeとの紛争を抱えていた。あるインフォーマントによれば、紛争の原因は、ウシの給水地が同じ場所だったために起きたという。TsamakoもKonsoも、放牧するウシの給水にWeito川を使っており、そのときにウシが交じり合い、一方のウシが他方の群れについて行って行方不明になることがあった。Derg時代になってから、それがもとで紛争になったのだった。²⁰また別のインフォーマントによれば、Auno ArgoというShala地域集団の男がDerg時代に、Ongotaにいるオジのところに行き、その帰り道にWeitoでウシに給水をさせていたKonsoを殺した。彼はそのままShalaに帰ってしまい、Konsoはその報復に戦争を開始した。その結果、Konsoとの紛争で10人近くのTsamakoが殺されたという。²¹Konsoとの紛争で直接の影響をこうむっていたのは、Kolmeのテリトリーの対岸に住んでいるUncheteとDumaの地域集団だった。

現在Uncheteの世帯の大半は、川から15キロほど離れた山のふもとにあるが、紛争以前の集落は、川から5キロばかり離れた現在のWeitoの町付近にあった。山際は、水の便が悪かったためである。乾季にはこのあたりで暮らし、雨が降って周囲が冠水すると、水はけのよい山際に移動するという居住パターンだった。だがKonsoとの紛争後は、多くの世帯は山際に定住するようになった。²²

Dumaの集落はもともと山の上にあったが、家畜が増えたために、1940～50年代ごろに、牧草の多いWeito川西岸の低地に移動してきた。²³DumaもKonsoとの戦争のときには、ほとんどの世帯が山際に居住した。雨季には泉で飲み水を確保できたが、乾季には川際に移動し、集住した。Weito川に行く場合には、まず武装した男たちが偵察し、その後に女性や子供がウシを連れて移動した。畑は山際に天水畑を作り、Weito川で警護をしている者がわずかに河辺林のなかの畑を作っていた。放牧は、山側で行なわれていた。²⁴

²⁰ Kote Oita, Roobaltako, Algatako, Unchete と Ababa Dido, Bilbiltako, Ezmatako, Unchete, 2007年12月29日。

²¹ Dulo Wale, Nelbastako, Algatako, Duma, 2008年1月3日。

²² Kote Oita, Roobaltako, Algatako, Unchete と Ababa Dido, Bilbiltako, Ezmatako, Unchete, 2007年12月29日

²³ Dulo Wale, Nelbastako, Algatako, Duma, 2008年1月3日。

²⁴ Mekone, Roobaltako, Algatako, Duma, 2008年1月4日。

Unchete にとっても、Duma にとっても、Weito 川近くの土地は、放牧、狩猟採集、農耕、そして飲料水の確保のために、重要な意味をもっていた。Weito 川はウシの給水地だったし、Unchete の北東には広大で肥沃な放牧地が広がっていた。そこにはオリックスやガゼル、ダチョウなどの野生動物が群れをなしており、狩猟の対象ともなった。河辺林では、巣箱をかけるとミツバチがたっぷりとした蜜をたくわえた。また乾季には、水の涸れる山際とは異なり、Weito 川の川床を掘ると飲料水も得ることが出来た。さらに河辺林の湿地に開拓した畑 (buulo) は、規模が小さくとも、コンスタントな収穫が見込まれた。²⁵ 貴重な河辺林の耕作地は、だから、地域集団の分配役 (mura) によって、それぞれの世帯に分配されたのだ。分配時には、その地域集団の世帯だけでなく、近隣の地域集団もやって来て、分配を受けることもあった。²⁶ だが Derg 時代を通して継続した Konso との紛争によって、Tsamako はこの貴重な生態資源を、十分に利用することができなかった。

第3節 プランテーションの拡大

プランテーションがこの地域にやって来たのは、1990年のことだった。経営者である G は、すでにゾーンと郡の行政官の承認も取り付けており、プランテーションが開かれる土地をもつ行政区 (k'ebele) / 地域集団である Unchete と Duma と交渉にとりかかった。当時の Unchete の行政区長は Ababa Dido、Duma の行政区長は Gorayo Hara だった。

このときに G が Tsamako たちにした約束は、次のように語られている。

G はここにやってくると、河辺林の畑 (buulo) にキャベツやバナナを栽培したいといった。そしてこの地域の土着の首長 (balabbat) ということで、aba Boko (Dale Armar の通称) を連れてきた。橋も作った。最初は川のそばで作っていたが、ここは土地も豊かなので、もっと畑を広げたい、土地を与えて欲しいと、首長を呼んで言った。あんたたちのウシも水を飲めるようになるし、畑もここに作れるようにし

²⁵ それに対して山際の傾斜地に作られる雨水の流水を集める畑 (balale) は、収穫が不安定だった。Tsamako は雨が降ることを予想して、そのような畑に穀物 (主としてトウモロコシ) を播種するが、十分な雨が降らずに作物が枯れてしまうこともある。

²⁶ 例えば Unchete の河辺林の畑は、Unchete の世帯のほかに、Gone、Olo、Shala といった、テリトリーに河辺林を持たない地域集団の世帯にも分配された (Dulo Lute, Bilbiltako, Ezmatoko, Unchete, 2007年12月24日)。

よう、といった。川はとても遠い、近くで水が利用できるようにしようと言った。²⁷

Tsamako 側の語りは、どれも非常に似ている。強調されるのは、第一に、プランテーションは当初、非常にささやかな規模の畑を開拓しようとして申し出た、という点である。第二に、プランテーションが設立されることで、Konso との紛争が収束することが約束された。そして第三に、西岸に水路を引くことで、飲み水や家畜用の水が用意に確保され、さらに灌漑耕作地も Tsamako に提供されると約束されたという点である。

Unchete の行政区長は、プランテーションを受け入れることに同意した。それに対して、Duma の行政区長は、当初拒否したといわれている。彼は次節で述べる武力蜂起とその弾圧のときに処刑されてしまったので、プランテーションの設立に彼が反対した理由は、今でははっきりとはわからない。プランテーションが当初開拓地に計画していた河辺林内に Duma の畑があり、それを接收されることを、不快に思ったのだとも言われている。だがプランテーションはその反対を押し切って、河辺林の開拓を開始した。

プランテーションの設立当初は、Konso と Tsamako の紛争は続いていたが、プランテーションは地方政府に頼んで Weito の橋に警察官を駐留させ、紛争の抑止に成功した。当初プランテーションは現在の第一キャンプ周辺に果樹園と綿花畑を開拓した。そして灌漑用水路を西岸に伸ばし、その先に、Unchete と Duma のために、用水路によって灌漑される耕作地を提供した。不安定な天水畑とは異なり、灌漑用水路の畑は、収穫がはるかに安定していた。

だが 1995 年に、プランテーションはさらに耕作地を拡大するために、再度 Unchete と Duma に畑の移転を迫った。Unchete は同意したが、Duma はそれを強く拒否した。

当時の Tsamako の首長である Dale Armar は、おそらくこの時点でプランテーションにより、現地との仲介役として見出されたのだと思われる。²⁸Dale は、プランテ

²⁷ Baya Ailo, Roobaltako, Elatako, Bola, 2007 年 12 月 26 日。

²⁸ 当時の Unchete の行政区長だった Ababa Dido は、当初プランテーション設立の計画が Unchete に持ち込まれたとき、Tsamako の土地はすべて首長のものだから、まず首長に相談すべきと言ったと述べている (Ababa Dido, Bilbilitako, Ezmatoko, Unchete, 2007 年 12 月 29 日)。だが私が 1995 年にこの地域で Tsamako の蜂起についてインタビューをしていたときには、Dale がプランテーションと関与し始めたのは、プランテーション設立からかなり年数が経過してからだと言われて

ーションが土地を拡大することを承認した。前章に述べたように、仲介者としてこの地域でローカルな政治的影響力を拡大しようとしていた Dale にとって、プランテーションは格好の政治的資源と見えたはずである。だが彼は、Duma の行政区長である Gorayo を説得することはできなかった。その事情をあるインフォーマントは、次のように述べている。

aba Boko (Dale Armar) はプランテーションに土地を与えた。G に与えたのである。この場所は「第一キャンプ」と呼ばれている。上流のほうにあるやつだ。この畑を耕作しているとき、Gorayo が Duma の畑を使わないようにと妨害した。「われわれの境界内ではプランテーションは作業をすることはできない。」と Gorayo は言った。「なぜプランテーションはここで作業をすることはできないというのだ。この土地を管理しているのは私だ。プランテーションに土地を与えたのは、あんたたちにも利益があると考えてのことだ。」このように Dale Armar は言う。こう Dale が言うと、Gorayo はとても怒った。彼らは姻族で、Dale は Gorayo の娘を娶った。姻戚であり、われわれのところでは、姻族は、姻族 (soda) を恐れない。なぜなら彼らの娘を娶っているのではないか。だから土着の首長とも見ずに、自分より年少とみなすのだ。Algako (Gorayo のクラン) の娘を娶ったので、首長としてみるというよりも、彼ら (Algako) より下に見るのである。²⁹

ここで述べられているのは、Duma の行政区長である Gorayo が、その呪力を畏怖されている首長 Dale の命令に服従しなかった理由である。³⁰Gorayo は Dale に、自分の娘を与えていた。首長筋の婚姻は、その呪力を利用して、お気に入りの娘の親族を強制的に同意させるというものだが、いったん親族関係が形成されると、立場上は娘を与えたほうが、受け取る側である首長筋よりも優位になる。そのために、Dale の命令にも、首を縦にふることはなかったのだという。

Gorayo はそのとき Duma の行政区長だった。Aba Boko は Unchete の (行政区長である) Ababa とは同意していた。だが Gorayo とは激しく対立した。Gorayo は「Unchete と (その隣接行政区である) Aimale は土地を売ったが、われわれの土地は売らない」

いた。おそらくは農地の移転をめぐり、Duma との交渉が不調に終わった後に、プランテーションは Dale と交渉を開始したのだと思われる。

²⁹ Wado Aike, morkito, Algatako, Olo, 2007 年 12 月 18 日。

³⁰ もし Dale がプランテーションに関与しだしたのが、その設立から数年後であるなら、この語りでは、最初の土地の接収と 1996 年の土地の接収が、混同されていることになる。

と言って **aba Boko** をののしり、対立した。**aba Boko** は、「この土地は私のものだが、**Duma** が自分の土地だというのなら、それでもいいだろう。だがお前の土地に生える植物には、小さなとげが生えて、お前を刺すだろう」と言った。これは呪いの言葉だった。些細なことに見えるが、首長の言葉なので、大変な呪いになるのだ。こうして、**Aba Boko** も怒って行ってしまった。³¹

上記の説明は、首長である **Dale** と **Duma** 行政区長 **Gorayo** の対立について述べている。**Gorayo** は、**Duma** の土地はプランテーションには渡さないという。だがプランテーションの設立は、**Konso** との紛争を抑止し、放牧地や給水地へのアプローチを容易にしたはずだ。さらにプランテーションによって提供された数百ヘクタールの灌漑用水路の畑も、**Tsamako** にとって貴重な生態資源となったはずである。プランテーションは耕作地を拡大した後も、**Unchete**、**Duma** 双方に、新たな灌漑用水路による耕作地を提供することを約束した。それならばなぜ **Duma** は、執拗にプランテーションの拡大に抵抗したのだろうか。

地図上に **Unchete** と **Duma** の位置、放牧地の配置、プランテーションの拡大計画をマッピングすると、その理由の一端が明らかになる。1995年の時点では、プランテーションは **Weito** 川の西岸から **Erbore** の町へ南西に走る自動車道の間を占めていた。**Unchete** と **Duma** の家畜は、道路の北西側の放牧地へ容易にアプローチできたとし、用水路によって家畜に給水することも可能だった（図3）。だがプランテーションは耕作地をこの自動車道を越えて、北西に拡大することを計画していた。**Unchete** にとっては、家畜を山際から北西に向けて **Jinka** へ続く自動車道を越えて、北に広がる放牧地へ出ることが可能である。だが **Duma** にとっては、至近の放牧地であった **Erbore** への自動車道の北西の土地が利用できないだけでなく、交通量の多い自動車道を除くと、北の放牧地へ出るルートも閉ざされることになる。**Duma** のテリトリーの南部から **Weito** 川にかけての土地は、森林であり、川に近づくに連れて密集した河辺林となる。ツエツエバエもいるこの地域は、魅力的な放牧地ではないのである（図4）。このような状況下で、**Duma** の行政区長はプランテーションの拡大計画に、執拗に反対したのだった。

他方で首長は、プランテーションとの関係を深めることに、大きな魅力を感じていた。彼は自分の家畜群を、プランテーション周辺で放牧し始めた。**Konso** との紛

³¹ Wado Aike, morkito, Algatako, Olo, 2007年12月18日。

争以来、家畜の密度が低かったこの地域は、豊富な牧草があった。また彼は自分の親族の少年たちをプランテーションあずけ、教育を受けさせた。彼は Derg 時代から、初等教育を受けた者が Hor において強力な仲介者となっていたのを目にして、教育の重要性を認識していたのだと思われる。さらに彼は、プランテーションのクルマを利用して、自由にプランテーションと首長集落の間を移動できたし、何がしかの金をもらい、Erbore 周辺で酒を飲んだり、取り巻きにおごることも出来たのだった。

このように、プランテーション、首長、Unchete、Duma と、それぞれの立場の利害が絡み合い、対立した結果、悲劇的な事件が勃発する。

第4章 武力抵抗とその結果

第1節 Dumaのプランテーション襲撃

1996年2月23日の夕方、プランテーションの農業技術者 Gezahegn Haile は、マネージャーの Mekonen を含む5人と、クルマに乗って Duma の集落近くの車道に出てきた。その日、綿花畑に入った Duma の仔ウシを、畑の守衛が追い払おうとして殺してしまった。そのことで Tsamako 側から賠償の話し合いのためにこちらに来るようにとの催促が、何度もあったからである。Gezahegn は話し合いに行くことに、乗り気ではなかった。なぜなら、それまで何度も Tsamako はプランテーションの綿花畑にウシを追い入れており、そのたびにトラブルとなっていたからだ。Gezahegn にはまるで Tsamako が挑発を繰り返しているように思えた。だから今回の事件も、背後に何か陰謀があるのではないかと思ったのである。

Duma の集落近くに来ると、道の上で Duma の行政区長である Gorayo を始めとする長老たちが待っていた。道の両側は深い森だった。Gezahegn たちが促されてクルマから降りると、突然森から銃声が聞こえた。森の中に隠れていた Tsamako の青年たちが、発砲したのである。たちまち2人が殺された。Gezahegn たちはすぐにクルマの下に隠れ、そのまま森の中に飛び込み、命からがら逃げのびたのだった。

Tsamako たちは次いでプランテーションを襲い、守衛とその妻を殺した。さらに翌日の首都 Addis Ababa への帰郷にそなえ土産のヒツジを買うために、Erbore のマーケットに行っていたエンジニアのクルマが、プランテーションに帰る途中で Tsamako によって止められた。そしてクルマに乗っていた4人のエンジニアたちが殺された。³²

以上は、1996年に起きた Duma のプランテーションに対する襲撃を、プランテーションの職員の側から記述したものである。この襲撃で、8人のプランテーション職員が殺され、2人が重傷を負った。彼らはクルマのドライバー、耕作機械のエンジニア、医者、守衛、その妻といった人たちだった。経営者の G はたまたま Addis Ababa におり、難を逃れた。彼は事件の連絡を受けると、夜を徹してクルマを運転し、翌朝にはプランテーションに到着したという。そしてすぐに、南オモ・ゾーンの行政府 Jinka の警察に、事件について通報した。

³² Gezahegn Haile, 2008年1月15日。

ではなぜこのような事件が起きたのか。事件発生約半年後、私は現地で5人のインフォーマントから聞き取りを行なったが、Tsamako側からの説明は、だいたい以下のようなものだった。³³

襲撃を行なったのは、Dumaの若者たちだった。その日、Gorayoの畑で収穫のための共同労働があり、それにDumaとBolaの住民が参加していた。そこにDumaの少女が、自分の追っていた仔ウシがうっかり綿花畑に入ったところを、守衛に鞭打たれて殺されたと駆け込んできた。すでに前日、プランテーションの綿花畑でDumaの仔ウシが1頭、運転手の不注意でブルドーザーにひき殺されていた。³⁴少女の知らせを聞いて激昂した若者たちは、銃を手にとって、プランテーションの幹部たちを襲撃しようとしたのである。

だが仔ウシを殺されたということだけで、なぜ彼らはプランテーションを襲撃したのだろうか。その説明は、プランテーション側（あるいはUnchete側）の住民か、Duma側の住民かによって異なっている。例えば当時プランテーションで働いていたHor出身の男性Aによれば、青年たちは、共同労働でふるまわれたビールに酔っており、衝動的に襲撃を企てたという。それに対してDumaの住民であるDによれば、そもそも仔ウシは水を飲んでいただけで、綿花畑には侵入していないし、共同労働では酒は出されておらず、誰も酔っ払ってはいなかった。若者が襲撃をしたの

³³ これらの情報は、1996年8月に5人のインフォーマントから聞き取ったものである。以下順に、その属性を示す。A；当時の推定年齢35歳、出身民族Hor、事件当時はプランテーションで、経営者側とTsamako側の仲介役として雇用されていた。B；20代後半、Asaso一族、Tsamakoの首長筋の一員。事件当時はプランテーションとは道路を挟んだ反対側にある放牧キャンプに滞在していた。C；50代、Tsamako、Unchete在住。プランテーションには当初から懐疑的だが、反抗的な言動のために事件後警察に捕らえられ、Jinkaの刑務所に3ヶ月拘留された。D；20代、Tsamako、Duma在住。E；40代後半、Tsamako、Duma在住。

³⁴ しかし聞き取りをした5人のインフォーマントのうち、前日にトラクターによって仔ウシがひき殺されたのを実際に見たものはいない。仔ウシが殺されたとはっきりと主張するのは、Dumaの住民のEとDのみだった。

プランテーションで働いていたA、首長の親族であるBによれば、事件当日に農場の労働者が仔ウシを打ったのは、Dumaのウシが綿花畑に侵入し、綿の葉を食べたからである。Bによれば、その前日もDumaの若者がいやがらせのために綿花畑にウシを入れて、農場の労働者と対立していた。このときDumaの若者たちは、綿花畑でウシが葉を食べることを、プランテーションの経営者であるGが許可していると言い張り、労働者たちと押し問答になった。

は、プランテーション側が仔ウシを殺しておきながら、言を左右にしてその代償を支払おうとしなかったからである。³⁵

前節で述べたように、Duma にはプランテーションの拡大を拒否する十分な理由があった。ここでさらに、襲撃前の Unchete と Duma の状況を、補足しておこう。³⁶ まず畑であるが、プランテーションは綿花畑の北西側に、灌漑による畑を、Unchete に対し 93 世帯分、Duma に対して 136 世帯分与えていた。しかし Tsamako はこれでも十分な補償ではないと不満を持っていた。プランテーションは、農地を拡大するために、これらの畑を再度放棄するように迫っていた。

次に放牧地であるが、Unchete のウシは、プランテーションから Jinka への車道を 10 キロほど北西に行った Bula というちょっとした山道のあたりに放牧されていた。そこから東へは、車道の北に放牧地が広がっている。一方 Duma のウシは、Duma 集落とその南の Gisma でほとんどのウシが放牧されていた。また一部のウシは、Unchete と同じく Bula で放牧されていた。

Bula の東に広がる放牧地は、プランテーションから離れており、豊かな牧草がある。また Unchete にとっては、集落から 5 キロほどの距離である (Duma からは 15 キロ)。ただし給水地である Weito 川から遠い (15 キロ) という難点があった。もし拡大したプランテーションの北西端の灌漑用水路でウシの給水が可能になれば、この問題は解決する。

他方で Duma の場合、Gisma の放牧地はプランテーション周辺に比べると、牧草が少なく、あまり魅力のない放牧地だった。そこで日帰り放牧では Duma 集落から北へ向かうのだが、プランテーションが Unchete の山裾まで拡大されると、Bula へのルートは閉ざされる。そこで幹線道路の北側、Weito の町の東側の放牧地を目指すことになる。この放牧地に近い Weito 川の給水場は、濃密な河辺林の切れる、Konso-Jinka 間の車道の橋のあたりだが、プランテーションを横切らずにそこにいたるには、まず Erbore からの車道を北東に進み、さらに迂回して南西に進まねばならず、片道 20 キロ近くにもなる。往復に丸一日を費やす計算になるが、家畜に牧草を

³⁵ 事件後 10 年以上が経過した 2007-2008 年の調査では、Duma 以外のインフォーマントの多くが、襲撃前の青年たちはビールで酔っていたという語りをしている (Wado Aike, morkito, Algatako, Olo, 2007 年 12 月 18 日、Dulo Lute, Bilbiltako, Ezmatako, Unchete, 2007 年 12 月 24 日、Baya Ailo, Roobaltako, Elatako, Bola, 2007 年 12 月 26 日)。

³⁶ 以下の情報は、Taddare Sura, Wataanya, Riis, Gandarab, Hor, 1996 年 8 月 22 日による。

食べさせつつ移動する日帰り放牧で、少なくともプランテーションを南北に通り返ける片道 10 キロ近くを牧草のない車道を通らねばならないことは、Duma にとってはかなりの環境の悪化に思われただろう。

プランテーション側は当初、Tsamako に対して、灌漑農地だけでなく、用水路を用いて家畜の水場をつくることも提案していた。だから上記のような給水の困難は、起きないはずだった。だが当時は水場にも水がなく、そこへ水を引く用水路にも十分な水がなかった。そのために Duma の住民は、手近で水が充分にある綿花畑の用水路をウシの給水に使っており、そのために畑の守衛とトラブルが絶えなかったのである。³⁷

以上は Duma が Unchete にくらべて、プランテーションの拡大に反対せざるをえない理由を、資源利用の空間的側面から検討したものだ。しかし、暴力的な襲撃が行なわれた背景としてさらに、当時のプランテーション、首長、Duma、Unchete の間の感情的なしこりもあげることができるだろう。

襲撃が起きる 2 週間前に、プランテーションの拡大と Unchete、Duma の耕作地の移転をめぐる、G を含むプランテーション側、Tsamako の首長である Dale、Unchete と Duma の住民たちの間で、会議が持たれた。Jinka の行政府からも参加者がいた。プランテーション側は耕地の拡大を求め、Tsamako 側には別の灌漑耕作地を補償することを提案した。一方 Tsamako 側は、現在の耕作地が少ないこと、ミツバチの巣箱をかける森も減少していること、さらにかつてたくさんいた野生動物が、プランテーションの労働者によって狩りつくされてしまったことに対して不満を述べ、意見は平行線をたどったという。そして業政府側は、15 日後に決定を与えることとした（襲撃はその前に起きた）。

それまで Duma の何人かの若者たちは、プランテーションの経営者とそれに従っている Unchete の住民に対して敵対していた（彼らは Duma の行政区長 Gorayo の親

³⁷ ただし当時プランテーションの農業技術者をしていた Gezahegn Haile によれば、Tsamako は綿花を食べさせるために、意図的にウシを畑に追いやっていたという。とくに事件の起きた 2 月は、この地域は大乾季に入って牧草が少なくなっており、緑滴る綿畑は、Tsamako にとって、格好の放牧地になったという。

牧童が、意図的にウシを綿花畑に追い入れていたことは、事実だろう。現在ここで放牧をしている Tsamako や Hor にたずねても、綿花はウシにとって非常によい飼料であり、農薬が散布されても、しばらくたつとウシには何ら影響はない。だから夜陰にまぎれて、しばしばウシを綿花畑に入れるのだという。

族だった)。³⁸そして最後の交渉の後、Unchete が立ち退きに同意したために、青年たちは Unchete の指導層を売国奴とののしり、殺すと公言した。危険を感じた Unchete は、これを警察に通報した。この Duma の若者たちは、事件当日 Unchete の住民が Duma の放牧キャンプからウシを逃したという噂を流し、敵対的なムードを煽っていたのだという。³⁹

この情報が本当ならば、Duma の襲撃は、単に自分たちの仔ウシが殺されたことに怒ったり、青年たちがそのときたまたま酔っ払っていたために暴走して起きたというより、プランテーション設立をきっかけに利得を得ようとする集団と、それによって資源を剥奪されると感じている集団の間の怨恨を背景として生じたと考えるほうが適切だろう。そして襲撃自体も、かなり計画的だったのだといえるかもしれない。⁴⁰

第2節 鎮圧とそれ以降の状況

(1) 鎮圧

だが仮に襲撃が計画的に行なわれたものであるにせよ、その結果は Duma の住民にとって悲惨なものだった。

襲撃の後、プランテーション経営者 G の通報を受け、周辺の行政府からすぐさま 60 人以上の武装警官が派遣された。⁴¹ 捜索隊にはゾーンの行政官たちも含まれており、彼らは捜索期間中プランテーションの敷地内に宿泊した。

襲撃後に、Duma の住人は姿をくらましたが、Unchete の住人は現場に残ったままだった。警官たちは Unchete の住人を使ってまず Duma の老人たちを捕らえ、人々

³⁸ Duma の Oita Hara と Geda Hara は、Unchete の A、B と対立し、彼らを襲撃すると公言していたという。Oita と Geda は Goraiyo の親族。A と B の Unchete での地位は明らかでない。Taddare Sura, Wataanya, Riis, Gandarab, Hor, 1996 年 8 月 22 日。

³⁹ Taddare Sura, Wataanya, Riis, Gandarab, Hor, 1996 年 8 月 22 日。

⁴⁰ Duma のインフォーマントによれば、だが、行政区長である Gorayo は、青年たちをなだめて、戦闘を回避しようとしたという。ついでに言うのなら、2008 年現在、「襲撃」は、頑迷な Gorayo という指導者とその酔っ払いの息子たちによるものだという、Duma 以外の Tsamako から聞かれる説明は、プランテーション設立によって生じた集団間の格差や、それによる特定集団の貧困化を隠蔽し、プランテーションにより一定の財や資源を享受している自分たちの立場を正当化しようとする言説といえるかもしれない。

⁴¹ 警官たちは、南オモ・ゾーンの行政府所在地である Jinka、北オモ・ゾーンの行政府所在地である Arba Minch、郡の行政府所在地である Key Afer のほか、Erbore、Konso から来たという。

の隠れている場所を白状させた。搜索の途中で、武装した警官たちに驚いて逃げた Tsamako が 1 人射殺された。搜索の結果、すべての銃は没収され、ウシは警察の駐屯地に集められた。老人や女子供も含め、多くの人々が連行された。そして人々を炎天下のサバンナの中に、一箇所に集めて拘束した。女や子供は 2~3 日で解放されたが、男たちは食べ物も与えられず、1 週間以上も棒でぶたれ、自白を強要された。結局 8 人の男たちが容疑者とみなされた。けれども実際に銃撃に参加したのは、そのうちの 3 人だけで、残りは無関係だった。行政官たちは、この男たちを Jinka ま で連行し、取調べを行なうと、クルマで連れ去った。

翌日 Duma の牧童が、ヤギを放牧しているときに、道の途中で男たちを縛るのに使われた縄が落ちていたのを発見した。その周囲に血が滴っていたので不審に思い、木で掘ってみると、死体が出てきた。少年は驚いて、叫び声を上げながら村へ帰ってきた。人々がさらにそこを掘ると、連行された 8 人の男たちの死体が、次々に出てきたのだった。

なお事件の 3 年後に、アムハラ語の新聞 ITIOP に「恐るべき大量殺人を告発した EPRDF の官吏消える：11 人の農牧民が衝突で銃殺され全員埋められる」という記事が出た（1999 年 7 月 26 日付け）。この記事によれば、襲撃が起こったのは 1996 年 2 月 19 日であり、事件後 30 人ほどの農牧民が被疑者として捕らえられ、そのうち 11 人が政府によって違法に殺されたという。9 人が Tsamako で、2 人がたまたま現場に居合わせた Hamar だった。中には対立を調停しようとした 60 代の長老とその息子 2 人が含まれていた。これは Gorayo とその息子たちのことだろう。また銃殺にかかわったのは、国防軍 (yämäkälakäya särawit) であり、直接手を下したのは 2 人で、どちらも大隊長 (mäto aläk'a) だった。一人は Oromo の Mähamäd という男で、もう一人は Tigre の Sälämon という男であるという。また死体を埋めた穴は、ブルドーザーを使って掘ったとあり、プランテーションの協力が示唆されている。

(2) 鎮圧直後の状況

事件の結果、プランテーションの被害者と同数の事件関係者が処刑され、また反プランテーション的とされた 10 人近くの住民が、8 年から 10 年の刑を受けて Jinka の刑務所に服役した。

プランテーションの周辺では、銃・槍・鉈・ナイフを持ち歩くことが禁じられた。また Weito にかかる橋のそばにあった警察のキャンプは廃止され、かわって Jinka への車道と Erbore への車道の交差点に恒久的な警察駐屯地が作られた。

プランテーションはもはや Unchete、Duma と交渉をすることなく、耕地を拡大し始める一方、それぞれの集団に、新たな灌漑耕作地を与えた。プランテーションの南西側の、自動車道の北が Unchete の、南が Duma の耕作地となった（図 4）。

事件の発生とその鎮圧のしかたは、地域の住民に大きな衝撃を与えた。プランテーションが国家権力と密接な関係をもっており、いざとなればそれを利用して、なかば私刑のようなかたちで地域住民に制裁を与えうるということが、明らかになったからである。事件の後には、プランテーションの持つ権力をめぐる不穏な噂が流れた。

Duma の南の行政区 Gisma には、1986 年から Mekanie Yesus という福音派キリスト教系のミッションの支部が設立され、診療所を開設している。何人かの北欧人がここに駐在し、Gisma の Tsamako に大型の堀棒を与え、氾濫原を利用した在来農法の改善に取り組んでいた。この NGO は、上流で行なわれていた大規模開発に対して、クレームを付けうるポジションにあったはずである。だがこの事件直後に、クリニックは Jinka の警察の手入れにあったという。

Tsamako は普段あまり多くの現金を所有していない。だから急患を連れてきて治療費を支払うことが出来ない場合は、家畜を売って現金を手に入れるまでの担保として、所有する銃を置いていくことを常としていた。ところが警察は、このクリニックが武装蜂起を準備しているという容疑で、突然家捜しをしたというのである。銃はその証拠物件として取り押さえられ、クリニックの活動は停止させられそうになった。このときは上部団体のエチオピアでの活動も含めて、ノルウェイ大使館が介入するほどの問題となったという。

この噂の真偽を確かめることはできなかったが、このような噂が流通すること自体、プランテーションの背後には国家権力が控えており、それは土着の住民どころか、外国の NGO の介入も阻むほどの力をもっていることを、人々はひしひしと感じていたことを示している。

またプランテーションの出資者がエリトリア人であったことも、エリトリア戦争が始まる以前、エチオピアがエリトリアの強い影響下にあると思われていた当時においては、プランテーションと国家権力の結びつきを想像させるに十分なものであ

った。もちろんこれは、一般の Tsamako 住民ではなく、ある程度学校教育を受けた住民の感じていたことではあるが。

いずれにせよ、この鎮圧以降、Tsamako は誰一人として、プランテーションに対する反感を公に口にすることはできなくなったのだった。

(3) プランテーションと行政官たち

事件後は、私の知人の Hor の間では、プランテーションはゾーンの官吏たちに賄賂を贈っているの、この事件は表面化しないだろうと噂されていた。

プランテーションと地方政府の関係については、現在のところ詳しい状況は明らかではない。だがさきに紹介した ETIOP の記事によれば、この事件は中央政府に伝えられても、州 (kilil) の問題だと突き返されたという。またそこでこの件を追求していた Demisi という検察官は、職から追放され、犯罪は隠されたままになっているとしている。少なくとも事件後3年は、この件は公にされることなく、州レベルで内々に処理されていたようである。

だが8人もの住民を裁判にかけることなく処刑するという異常事態は、やがて地方政権内でも問題化した。告発を行なったのは、Channe Abata と Tariku Abata という、Tsamako の血を引く政府関係者だった。彼らは Amhara を父、Tsamako を母として持っており、Channe は Jinka の財務局で、Tariku は南部諸民族州で Tsamako の民族代表として働いていた。彼らが南部諸民族州政府に、南オモ・ゾーンの行政官たちが、プランテーションと結託して、無実の Tsamako 住民たちを処刑させたことを訴えたのである。

告発されたのは Jinka の行政官と、G だった。そのうち3人の行政官が有罪となり、それぞれ20年、10年、5年の実刑判決を受けた。なおこの後に Channe と Tariku は病死した。Tsamako たちはその原因を、告発・逮捕された Amhara の行政官たちが、Shāwa の Mānz にある Amhara の呪術師のところに行き、二人を呪い殺すように依頼したからだと言っている。⁴²

(4) Duma と Unchete

⁴² Wado Aike, morkito, Algatako, Olo, 2007年12月18日。

Duma の襲撃が鎮圧された後、Duma では L という男が行政区長となった。L は前行政区長で、プランテーションと対立した Gorayo と同じリネージの出身だったが、事件の後に政府とともに事態の收拾に立ち働いた。このとき Unchete と Duma は一時的に同じ行政地区となり、Lake が両方を管轄した。Lake は現在に至るまで、Duma の行政区長をしている。

Unchete では、Ababa にかわり、D という男が代表となった。Unchete と Duma は同じ行政区となったので、D は L の下で働くという形になった。4 年後に Unchete と Duma がふたたび別々の行政区となったとき、首長筋である Asaso 一族の GA が地方政府に任命され、Unchete の行政区長となった。GA はこの地域で、Duma の事件後しばらくして死亡した Dale Armar の後を次いだ Tsamako の首長 Kore Ali の代理として、プランテーションで雇われていたのだった。だが GA は 2005 年の総選挙のときに、反政府側にたって選挙活動をおこなったので、選挙後行政区長を解任されてしまった。代わって Unchete の行政区長には、同じ Asaso 一族で、Dale の長男である AD が任命され、現在に至っている。

プランテーションが耕作地を拡大して以降、Unchete と Duma は、プランテーションの南西の Balaisa と呼ばれる場所に、それぞれ灌漑耕作地を得ている (図 4)。⁴³Unchete の住民の一部はさらに、プランテーションの北東側の Galo にも灌漑耕作地を耕作している。Unchete は Duma の 2 倍以上の面積の灌漑耕作地を手に入れたことになる。灌漑耕作地は、まずプランテーションが住民に分配し、余った土地をそれぞれの集団の mura が分配をした。Unchete の住人には、灌漑耕作地を複数入手する者もいる。1995 年から Weito の町が形成されたが、その周囲にじょじょに Tsamako を中心とする周辺の農牧民世帯が移住し始めた。多くの灌漑耕作地を持つ者の中には、それを他地域集団から移住してきたものに貸与し、個人的なネットワークを広げる者も出てきた (宮脇 2009)。

⁴³ 1997 年にこの地域を調査している Melesse によれば、プランテーションは Unchete と Duma の各世帯に、0.5ha の灌漑耕作地を提供したと主張していた。だが実際には、二つの地域集団の全世帯 291 戸のうち、灌漑耕作地を手にしたのは 229 戸だった。またこれらの世帯は、年間 6~10birr を、プランテーションに支払う必要があった。またプランテーションがこれらの畑を灌漑するのに流す水の量も不十分で、1996 年にはこれらの灌漑耕作地すべてで栽培が失敗したという (Melesse 1997:760-761)。

利用できる放牧地に関しても、両集団には差が出た。Unchete は集落の南東に広がっていた放牧地をプランテーションに接収された代わりに、北東部の Galo と呼ばれる場所まで伸びている用水路を給水地として、車道の北に広がる Wangalaka、Chelbi、Kambe、Meela などのサバンナとその背後の山地を、放牧地として利用できるようになった。一方 Duma はプランテーションによって北への放牧が困難になった。灌漑耕作地である Balaisa まで伸びている用水路を給水地として用いることができるが、放牧は牧草の少ない南部に限られることになった。

蜂起の鎮圧後、周辺の社会的状況も変化した。町の周囲は警察の駐屯地が作られ、政府による統制が徹底してしかれるようになった。また町が形成されたために、他民族からの移住者が増加すると同時に、貨幣経済が浸透した。そのような状況下で、生態資源を利用して蓄財を試みる者も出てきた。

Unchete の代表だった D は、彼が代表だったときにプランテーション南の河辺林の Lao という土地を Konso の移民とともに開墾した。D の背後で、Z という Unchete の男が、開墾計画のシナリオを書いていたといわれる。Z は委員会 (komite) なるものをでっちあげ、Konso、Gawada の移民から、一人 30birr から 50birr の金を徴収し、D を通して森林の開墾を許可した。また他の Tsamako を説いて、隣接した土地に耕作地を開墾させ、他民族による開墾を Tsamako 主導による開墾であるかのようにみせかけようとした。Z はそれによって 9,000birr もの金を集めたといわれる。だがこれは、町の住人から違法であると告発され、政府によって中止させられた。D はその責任を問われたが、背後にいた Z は、追及を逃れたという。⁴⁴

(5) 首長筋

Dale Armar によってプランテーションに送り込まれた Asaso 一族の少年たちは、そこで初等教育を受け、プランテーションのメカニクスとなり、農業機械の運転や修理に携わるようになった。またプランテーションは、Dale に一定の金額の金を渡していたといわれている。Dale は 1999 年に死亡した。G は Dale の葬式に参加し、Dale の子供に今後も支援を続けることを約束したという。Duma の襲撃は、政府によるプランテーション一帯の治安管理を促進したが、他方で G に、現地住民の懐柔が重要であることを、あらためて認識させたのだろう。

⁴⁴ Wado Aike, morkito, Algatako, Olo, 2007 年 12 月 18 日。

Dale の死後首長位を継いだのは、Ali Kore だった。Ali は高齢で、みずからプランテーションにおもむくことはなかった。しかし、プランテーションで働く Asaso 一族の青年たちによって、プランテーションと首長筋の関係は維持された。

すでに述べたように、2000 年に、Unchete の行政区長 D は解任され、Asaso 一族の GA が新たな行政区長に選出された。郡政府は土着の首長筋を懐柔するための予算を計上し、彼らを行政地区の長に任命することで、現地住民の統治をより効果的に行なおうとしたためといわれる。⁴⁵GA は 1992 年にすでに、Dale に命令されて彼の家畜の放牧をしに、プランテーションの近くに移住をしていた。首長筋は Tsamako に畏怖されているだけでなく、首長筋とプランテーションの間の親密な関係も知られている。さらに Unchete はプランテーションの設立によって利益を得ていた。だから郡が GA を新たな行政区長として任命することに対しては、反対は起きなかった。

彼は行政区長に任命されると、首長筋とプランテーションの仲介も行なうようになった。だが 2003 年のプランテーションの操業停止で、いったん首長筋とプランテーションとの関係は途絶える。プランテーション労働者として働いていた Asaso 一族の青年たちは、首長集落に帰郷した。

一方 Unchete の行政区長であり、また自分の放牧キャンプもプランテーションの近辺に持っていた GA はこの地域にとどまった。そして郡政府の思惑に反して、2005 年の総選挙では、反政府側にたって選挙運動を行なった。⁴⁶だが選挙は政府側の勝利に終わり、彼は行政区長を解任された。

選挙中に郡政府は GA が反政府側についてたことを知ると、Dale の長男である AD の懐柔にかかり、政府側につけることに成功した。AD も 1995 年にウシの放牧にプランテーションの周辺に移住しており、見張り番としてプランテーションで働いていた。選挙当時は、プランテーション周辺で放牧をしていた。

2006 年に Omo Valley Agro-industry が操業を再開すると、プランテーションは首長を呼び（当時の首長 Kore は老齢だったため、首長位の第一後継者である GS がおもむいた）、プランテーションの土地を祝福することを依頼した。GS は未婚産のヒツジを供犠し、祝福の儀礼を行なった。GA はプランテーションのガレージに入

⁴⁵ 土着の首長には、群政府から一定の月給が支払われるという。例えば Banna ではそれが月 400birr となっているという (Wado Aike, morkito, Algatako, Olo, 2007 年 12 月 18 日)。

⁴⁶ 彼の姻族の Hor に、この地域における反政府側のメンバーがいたためである。

り、ふたたび首長集落との仲介者となったが、やがてプランテーションには来なくなり、解雇されることになった。そこでプランテーション側はガレージで働いていた Dale の次男と相談し、Dale の長男で、Unchete の行政区長ともなっていた AD を首長とプランテーションの仲介役とした。

プランテーションは、AD だけでなく、現在の首長である GS にも、定期的に金を支払っているといわれる。首長筋は現在でも、郡政府にとっても、プランテーションにとっても、現地住民を懐柔し統治する、重要な仲介者とみなされているのである。

だが首長筋にとって、政府やプランテーションに完全に取り込まれてしまうことは、みずからの交渉の余地を狭めてしまう危険性がある。そのために首長筋は、つねに政府やプランテーションとも、一定の距離をおいている。

例えば現在政府は、「有害な慣習」として、「女子割礼」などの慣習の廃絶キャンペーンを行なっている。この地域では、Asaso 一族の婚姻のやり方が、強制的な婚姻であるとして、郡政府から中止の勧告を受けた。だが Asaso 一族は、伝統・慣習は現地住民の同意を得ることなくして廃絶はできないとして、この勧告に同意を与えていない。

また AD が Omo Valley Agro-industry のマネージャーから仲介者としての役割を求められたときにも、すぐさまそれに同意することをしなかった。そして Duma の襲撃事件のことを示唆し、現地住民と適切な関係をもつことができなければ、プランテーション経営にどれほどの困難が伴うかを説き、プランテーションから最大限の譲歩を引き出そうと試みたという。

首長筋側は、みずからが現地住民に対して、唯一支配の正統性をもつ存在であることを担保にすることで、政府やプランテーションに対して譲歩を迫ることが出来る。逆に現地住民に対しても、政府やプランテーションとの関係を通じ、力を誇示したり、職を斡旋したり、金品を得たり、クルマの便宜を利用したりすることで、強い影響力を振るうことが可能になる。

だが政府やプランテーション側に近づきすぎて、完全に取り込まれることは、現地住民の利害から解離してしまう。そして首長筋のもつ仲介者としての戦略的立場を危うくするだろう。このことは、Dale Armar と Duma の対立からも、明らかである。そのために首長筋は、政府やプランテーションという権力と、現地住民の間で、一定の距離をとりつつ、自分の切るカードの効力を最大にしようとするのである。

首長筋はこのようにして、プランテーション、地方政府、現地住民の間に立つことで、その影響力を強めていった。また 1980 年代までは、物理的な距離によって限定されていた地域支配の影響力を、Gisma を超えて Unchete のあたりまで拡大することに成功したのである。

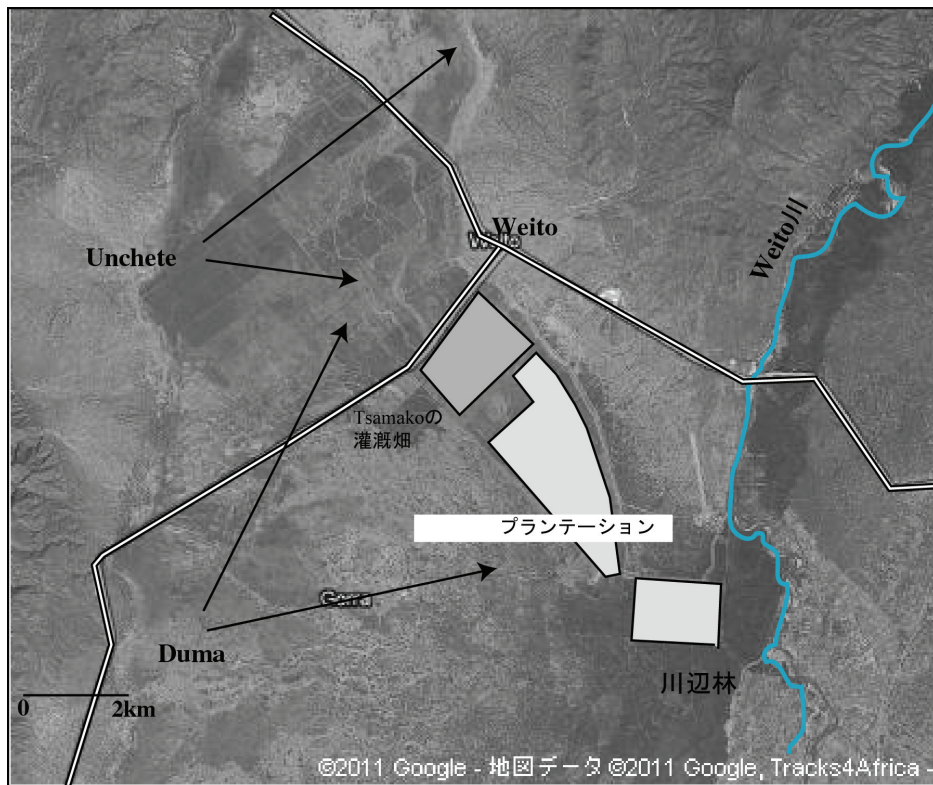


図3 1995年におけるプランテーションの配置と Unchete、Duma の放牧ルート

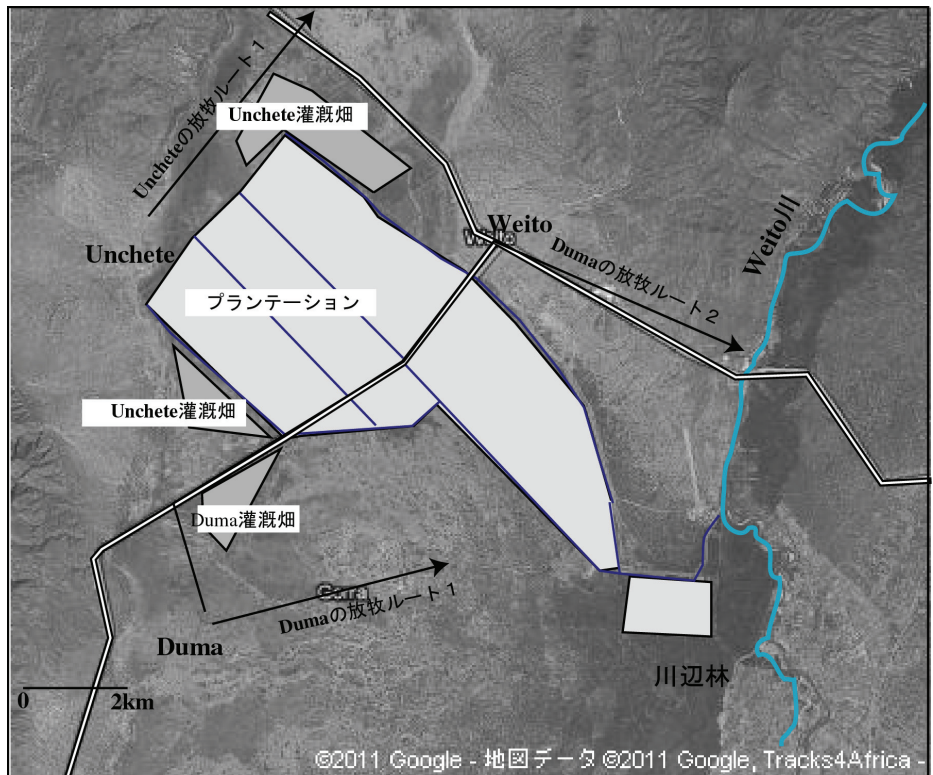


図4 2007年のプランテーションの配置

第5章 結論

本稿は、プランテーション開発というプロジェクトがもたらされたことにより、地元の農牧民 Tsamako の諸集団が、いかなる対応を示したのかを、1996年に生じた地元集団のひとつ Duma の武力蜂起とその後のプロセスに焦点を当てることによって、明らかにした。

Birale Agricultural Plantation は、エチオピア社会主義政権が社会主義経済から混合経済に舵を切ったときに、新興の資本主義的企業家によって、エチオピアの中央から地理的にも文化的にも隔絶した西南部の低地に開拓された。内戦の後に政権が交代し、エチオピアがアメリカの政治的支援のもと資本主義経済体制をとると、プランテーションは新たな企業経営のモデルとして政府の支援を受け、経営規模を拡大していった。まったくの未開の土地に、道路、ダム、用水路網、広大な耕作地を建設するには、莫大な初期費用が必要だった。これらの資金を回収するために、プランテーションにとって経営規模の拡大は、必要不可欠なものだっただろう。

プランテーションの設立は、いくつかの面で地元の Tsamako 社会にインパクトを与えた。一つは、プランテーションの拡大に伴う生態資源の減少である。耕作地の拡大に伴い、Tsamako は放牧地から締め出されていった。また河辺林の伐採や農薬の使用によって、Tsamako の主要な生業のひとつである養蜂を、Weito 川の近辺で行なうことは不可能になった。また増加するプランテーションの労働者は、その地域に豊富にいた野生動物や、Weito 川の魚を、根こそぎ取りつくしてしまった。

一方プランテーションは、Tsamako と Konso の間の紛争の間に割って入ることで、この地域の治安を維持し、この近辺の放牧地を利用可能にした。さらにプランテーションの拡大にともない、地元の集団に灌漑耕作地を提供した。

1996年時点での Tsamako の諸集団の対応は、異なっていた。首長集団は、地元集団とプランテーションの仲介による権力基盤の拡大を狙っていた。それに対して Duma は、プランテーションの拡大に抵抗し、隣接する Unchete は対照的に、プランテーションの提供する便宜を受け入れ、妥協をはかろうとしていた。

このような対応の違いは、第一に、それぞれの利用する生態資源に対する、プランテーションの及ぼす影響の相違によっていた。

地元集団の Duma と Unchete にとって、プランテーションの設立は、それまで隣接する Konso との紛争のために利用ができなかった放牧地がアクセス可能となり、

利用可能な生態資源が増えることを意味した。またプランテーションは用水路を利用して、Unchete と Duma に灌漑耕作地を提供した。これはそれまで不安定な天水農耕によっていた Unchete と Duma にとっても、貴重な資源となっただろう。

だが 1995 年以降のプランテーションの北西部への拡大は、これら二つの集団に対照的な影響をもたらした。北の山沿いに集落をもつ Unchete にとっては、さらに北方の放牧地が利用可能であったのに対して、Duma にとっては、自動車道を除けば、放牧地に至るルートが閉鎖されることになってしまったのだった。さらに提供されていた灌漑耕作地の移転と、それに代替する耕作地の提供も十分ではなかったことが、不満に拍車をかけた。

他方で首長集団にとっては、プランテーションの設立された地域は自分たちの居住する地域から 40km も北にあり、その設立も拡大も、家畜の放牧地には直接の影響はなかった。それどころか、ランテーションとの関係を利用することで、放牧キャンプを送り込むことも可能となり、資源利用の面からはむしろ好ましいものだった。

さらに、プランテーションが設立される以前の集団内における政治的な位置も、重要な要因だった。プランテーション設立当時の首長である Dale は、Tsamako と Hor という地域集団間、Konso 商人という外部集団、さらに地方政府の行政権力の間を仲介することで意識的に権力基盤を拡充しようとしていた。これは、首長筋という集団内でのポジションによるだけでなく、仲介者が権力をふるってきた Hor の Gandarab 地域集団と、地理的・政治的に密接な関係にあったことも大きく影響していただろう。それに対して、Duma や Unchete は、そのようなポリティクスからは周辺的な位置にあった。それが、プランテーションが設立されたときの対応の差に表れたのだと思われる。

Duma の武装蜂起とその鎮圧を境にして、それぞれの集団の対応は、一層対照的なものとなった。

首長集団は、プランテーションや地方政府、地域集団間の仲介者という位置取りを続け、権力基盤の維持をはかっている。またメンバーの一部は、プランテーション周辺で地方政府の行政の末端を担うようになり、1980 年代までは、物理的な距離によって限定されていた首長筋による地域支配の影響力を、Gisma を超えて Unchete のあたりまで拡大している。

Unchete は、鎮圧以降もプランテーションと妥協を続けることで、多くの灌漑耕作地を手に入れ、経済的な利益を得た。住民の一部はそれを他の住民に貸与することによって、自らの個人的なネットワークを拡充している。とくに耕作地の分配にかかわった行政区長と関係を持つ住民は、優先的に多くの耕作地を分配されたという。彼らは町にトタン屋根の「近代的スタイル」の家を建築し、町の文化に同化しつつある。また行政区長の親族の一部は、町に住んで、プランテーションで労働者として働き始めた。また町の住民との交流が増え、貨幣経済が重要性を増すにつれて、森林のような生態資源の一部を外部集団に貸与して、個人的な利益をあげる者も出てきた。このような状況は、特定の個人や親族集団への権力の集中よりもむしろ、地域の長老集団や行政区長による統制の弛緩と、住民による個別的な、新たな社会環境への適応を促しているように見える。

Duma は逆に、蜂起の鎮圧以降、新たな行政首長を中心として、プランテーションのさらなる拡大に対して、行政組織を通じた牽制を続けている。住民の多くは、プランテーションとも、またその近くに形成された町の住民とも、目立った関係は形成していない。

Duma の蜂起の後に、Weito の町の警察官は増員され、地方政府による治安管理は徹底するようになった。プランテーションと町には、現在では Tsamako の他集団からも多くの住民が移住し、その一部はプランテーション労働者となったり、町に定住し始めている。これらの住民の適応の在り方も多様であり、またそれぞれの地域集団におけるポジションによって、その戦術も分化している。これについては、また別稿で検討することにした。

参考文献

Melesse Getu

1995 *Tsemako Women's Roles and Status: In Agro-Pastoral Production*. Department of Sociology, Anthropology and Social Administration, Addis Ababa University. Addis Ababa: Addis Ababa University.

1997 Local versus Outsider Forms of Natural Resources Use and Management: The Tsemako Experience in Southwest Ethiopia, In *Ethiopia in Broader Perspective, Volume 2, Papers of the 13th International Conference in Ethiopian Studies*. Fukui, Kurimoto and Shigeta (eds.) 670-687. Kyoto: Nakanishi Printing.

Miyawaki, Y.

1992 Demographic Composition and Kinship Structure of the Village of the Tsamai Chief, Southwestern Ethiopia, *Proceedings of the Eleventh International Conference of Ethiopian Studies* (Institute of Ethiopian Studies, Addis Ababa University) , Vol.II, pp.226-243

宮脇幸生

1992 「首長村落をめぐる民族間関係－エチオピア西南部クシ系農牧民ツァマイの事例から－」 『アフリカ研究』 40:49-68.

2006 『境界の想像力 エチオピア国家支配に抗する少数民族ホール』 世界思想社

2009 『開発と抵抗 エチオピア西南部におけるプランテーション開発と牧畜民の抵抗戦術』 平成16年度－平成19年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書

Development and Resistance

The Predatory Expansion of Cotton Plantation and Survival Strategies of Pastoralists in Southwestern Ethiopia

Yukio MIYAWAKI

This paper aims to describe how indigenous pastoralists in southwestern Ethiopia have tried to struggle against and overcome the deprivation of their land that occurred as the result of a cotton plantation development project. By focusing on the process and result of the pastoralists' assault that broke out against the plantation in 1996, it will show that the incident diversified the strategies taken to survive the predatory expansion of the project.

The western bank of the Weito River in southwestern Ethiopia was a territory of the Cushitic pastoralists called the Tsamako. In 1990 an entrepreneur from Addis Ababa planned to establish a cotton plantation in this area, and started to negotiate with the local people. The two local Tsamako groups, the Unchete and the Duma, both became involved, and the Tsamako chief intermediated between the groups and the entrepreneur. When the Ethiopian socialist regime collapsed and the new government turned its policy toward a capitalist economy in 1991, the plantation started to intensify its operations. A new town called Weito was established near the plantation and soon became crowded with seasonal workers and merchants. Wild game was depleted, and the local people were deprived of their pastureland. The group to which the Tsamako chief belonged, on the other hand, developed its relationship with the plantation, and received economic support from it.

After the plantation had given notice in 1995 that it would expand its site, and had told the local groups to transfer their fields and pastures elsewhere, some young men of the Duma assaulted the plantation, and killed eight workers. Military forces were dispatched from neighboring towns to the town Weito, and the revolt was quelled immediately. Though both the Duma and the Unchete had been confronted with a similar difficult situation at first, the expansion of the plantation seems to have caused more difficulty to the Duma for their cattle herding than the Unchete, and it seems to have ignited their anger.

As a result of this incident, however, the survival strategies of the local Tsamako groups concerned became diversified. While the Duma withdrew from the negotiations with the plantation, the Unchete gained large irrigation fields from the plantation, and some of them started to live in Weito to develop their social network with the residents there. For its part, the group of the Tsamako chief started to spread its political influence to the northern part of Tsamako territory by intensifying its relationship with the plantation.